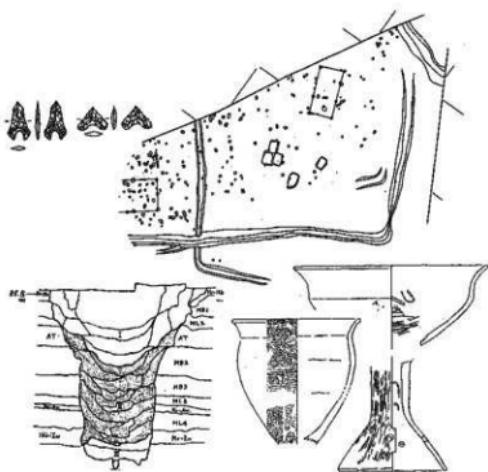


平成14年度

東九州自動車道(都農～西都間)関連  
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ



2003

宮崎県埋蔵文化財センター

## 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第76集

## 『東九州自動車道(都農～西都間)関連埋蔵文化財発掘調査概要報告書』正誤表

ページ・図 番号	誤					正				
表紙タイプ トル	埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ					埋蔵文化財発掘調査概要報告書Ⅲ				
巻頭図版 2	MBO	ML1	Kr-kb	MB1	ML1	MBO	ML1	Kr-kb	MB1	ML2
p3-表1	47	野首第2の「時代」の列		常温	鍋文					
p4-表1	57	唐木戸第5の「所在地」		木唐木戸	北唐木戸					
p13-18	石器・剥片各1点(図5・20・22)			石器・剥片各1点(図5・19・22)						
p13-19	石器(図5-19・23)			石器(図5-18・20・21・23)						
p15-表	21 石礫 剥片 石核			21 石礫 22 剥片 23 石核						
p37-図18	A区近世層敷跡(1/200)			A区近世建物跡(1/100)						
p60-119-20	M B1			ML1						
p79-左・右上(東より)				(北より)						
p85-115	火葬基			火葬墓						
p86-表8	尾之原・西畦原2(一次)・西畦原1の最下			[課群]	[課層]					
奥付	東九州自動車道(都農～西都間)関係			東九州自動車道(都農～西都間)関連						

表4 現地説明会等実施遠跡一覧(差し替え訂正版)

…訂正箇所

実施日	遠跡名	実施時間	参加者
平成14年 5月11日(土)	東畦原第1	13:30～15:30	175名
平成14年 5月16日(木)	向原第1 (上新田中)	11:00～12:30	生徒52名 教諭3名
平成14年 5月17日(金)	向原第1	14:00～15:30	74名
平成14年 5月26日(日)	湯牟田 前ノ田村上第1	13:15～14:30 15:00～16:30	106名 [課群] [課層]
平成14年 5月29日(水)	唐木戸第3	15:00～16:30	[課群] [課層]
平成14年 8月 9日(金)	唐木戸第1	10:00～11:00	[課群] [課層]
平成14年 9月14日(土)	小笠第1	9:30～12:00	[課群] [課層]
平成14年10月12日(土)	西畦原第1(2次)	13:30～15:30	[課群] [課層]
平成14年10月17日(木)	西畦原第1(2次) (上新田小)	11:00～12:15	[課群] [課層] 2名 [教諭] 1名
平成14年10月27日(日)	野首第2発掘体験 (県総合博物館主催)	11:00～12:30	[課群] [課層] 38名
平成14年10月27日(日)	前ノ田村上第1	13:00～15:00	[課群] [課層] 93名
平成14年10月29日(火)	牧内第1	14:00～15:30	[課群] [課層] 93名
平成14年11月 6日(水)	唐木戸第2	14:00～15:30	[課群] [課層] 89名
平成14年11月 7日(木)	音明寺第2(2次) 東畦原第1(2次)	13:00～15:30	[課群] [課層] 82名 [課群] [課層] 82名
平成14年11月19日(火)	野首第2発掘体験 (高鍋西小)	9:30～11:30	[課群] [課層] 25名 [教諭] 2名
平成15年2月1日(土)	銀座第1(2-3次)第2	13:00～15:00	65名

\* 東畦原第1(2次)調査区において上新田中生徒46名引率教諭3名充鋏体験実施

## 序

宮崎県教育委員会では、日本道路公団九州支社の委託により、平成11年度から東九州自動車道の都農～西都間建設工事予定地内に所在する遺跡の発掘調査を実施しています。

今年度は26の遺跡で本調査を実施し、旧石器時代から近世に至る各時代の貴重な資料を得ることができました。

中でも、旧石器時代の遺跡では、遺物の出土層と阿蘇山や霧島山系の火山灰との垂直位置関係が明らかとなってきており、石器の年代や変遷を知る上での基礎的な資料となるものと期待されます。

また中世の遺跡の中には、陶磁器類など豊富な遺物を有するものがあり、交通の要所にあって、拠点的な役割を担った集落か有力者の居館であったと推測されています。

そのような発掘調査の概要をまとめた本書が、学術資料のみならず学校教育や生涯学習の場で広く活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となれば幸いです。

なお、調査にあたってご協力いただいた地元の方々、関係諸機関に厚くお礼申し上げます。

平成15年3月20日

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良弘康

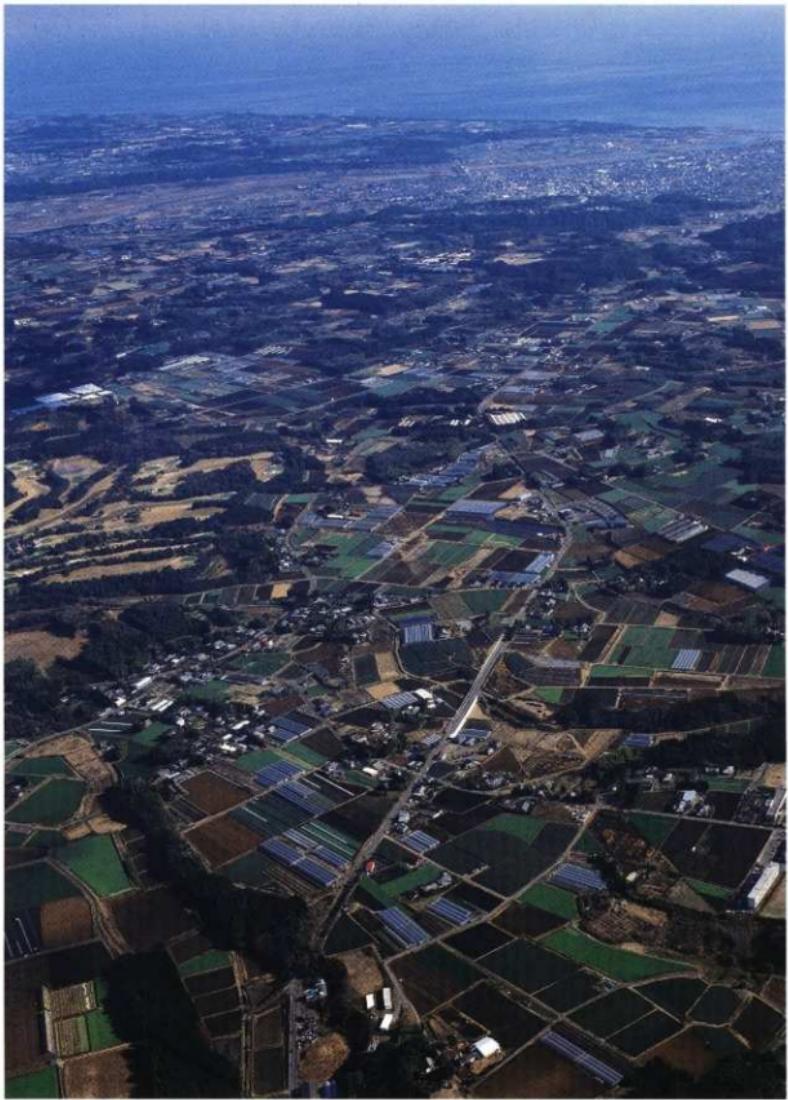
## 例　　言

- 1 本書は、平成14年度に宮崎県教育委員会が日本道路公団九州支社の依頼を受けて実施した東九州自動車道（都農～西都間）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書（第Ⅲ集）である。
- 2 本書で使用した遺跡位置図（図1）は、国土地理院発行の5万分の1図を基に、それを縮小して作成したものである。
- 3 本書で使用した方位は、国土座標第Ⅱ系に基づく座標北である。レベルについては、海拔絶対高を用いた。
- 4 遺構については下記の通りの略号を用いて表している。

S A 堅穴住居	S B 掘立柱建物	S C 土坑	S D 土壙（墓）
S E 溝状遺構	S G 道路状遺構	S I 集石遺構	

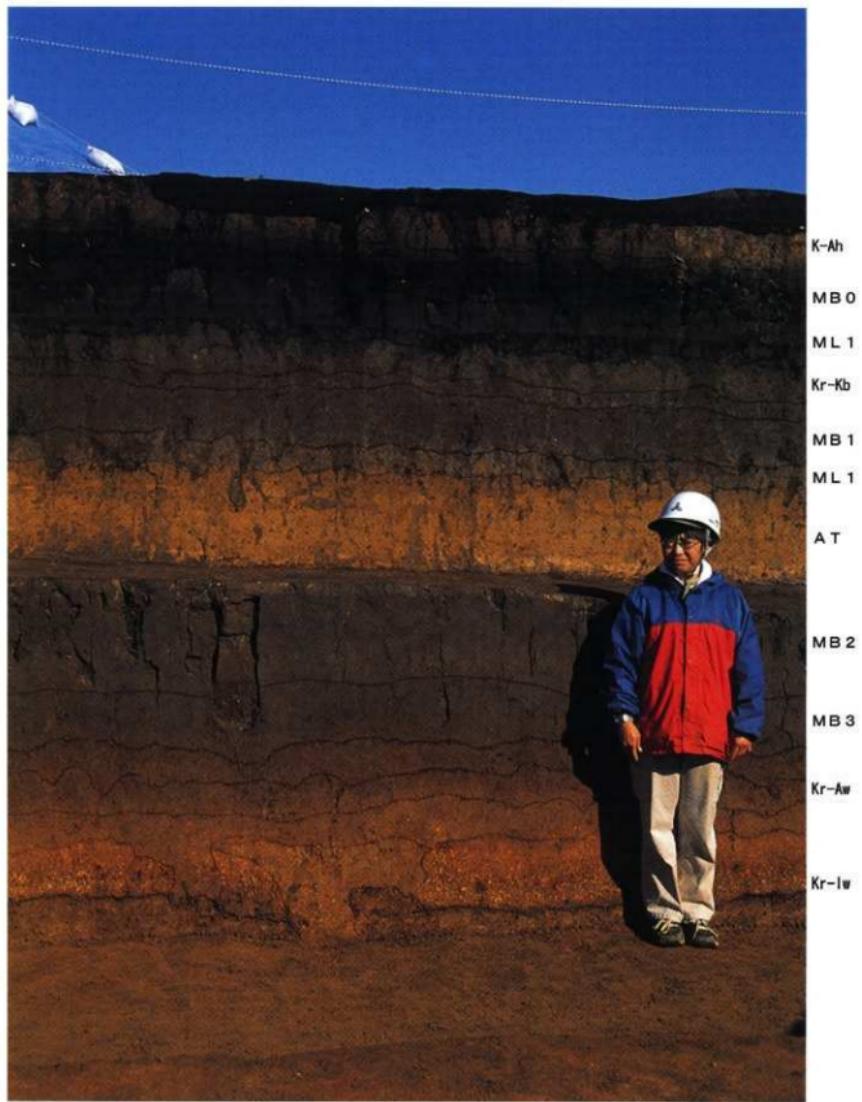
- 5 本書の執筆は、第I章を吉本正典が担当し、第II・III章については各遺跡の調査担当者が行った。また第IV章は、高橋浩子、藤木聰、松本茂、堀田孝博が分担した。  
表2は、松田清孝、表3は大村公美恵による。
- 6 本書の編集は吉本正典が行い、高橋浩子、藤木聰、今塩屋毅行、調査員成相景子が補助した。
- 7 下記の方々に、御指導・助言をいただいた。（敬称略）  
小畑弘己（熊本大学） 泉拓良（奈良大学） 本田道輝（鹿児島大学）  
田崎博之（愛媛大学） 柳沢一男（宮崎大学） 広瀬和雄（奈良女子大学）  
福井田佳男（文化庁） 加藤真二（文化庁）
- 8 調査の記録類及び出土遺物は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

巻頭図版 1

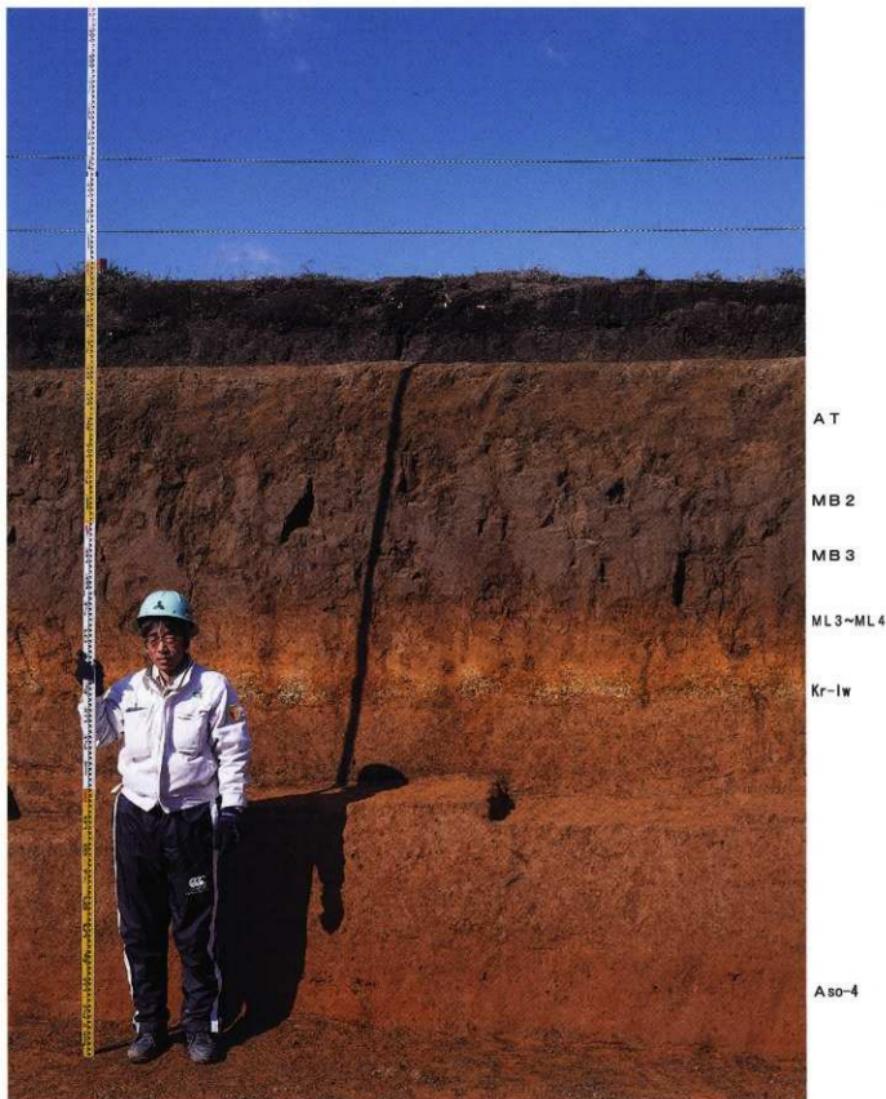


新田原方面より 遠景

卷頭図版 2

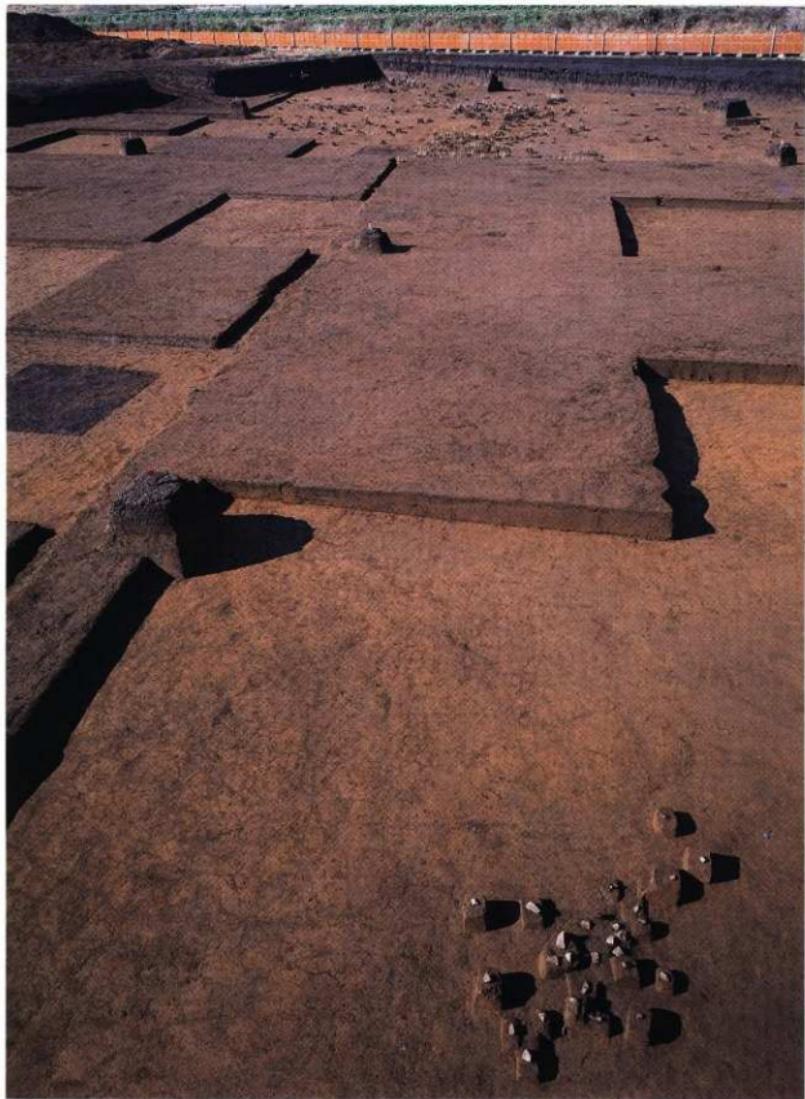


基本土層 (K-Ah下位)



基本土層（Aso-4まで）

卷頭図版 4



牧内第1遺跡（四次調査）調査状況



東畦原第2遺跡 A T下位 (MB 2上) 瓦群

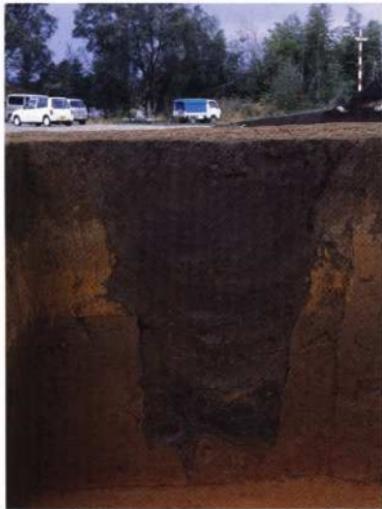


小並第1遺跡 A T上位 (Kr-Kb) 瓦群

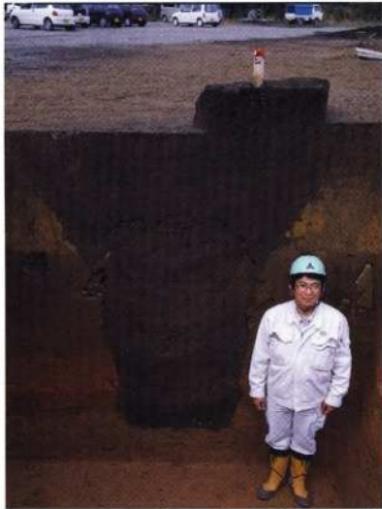
卷頭図版 6



西畦原第2遺跡（二次調査）陥し穴



SC1



SC3



老瀬坂上遺跡 散碟と集石遺構

巻頭図版 8



向原第1遺跡 弥生～古墳時代集落



前ノ田村上第1遺跡 中近世の集落

# 目 次

## 第Ⅰ章 はじめに

第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査地周辺の環境	5
第4節 層序	5
第5節 整理作業の概要	8
第6節 普及活動	9

## 第Ⅱ章 確認調査の結果

唐木戸第4遺跡 D区 10 唐木戸第5遺跡 13 小並第2遺跡 16 一丁田遺跡 17

## 第Ⅲ章 本調査の成果

銀座第1遺跡	18	銀座第2遺跡	22	銀座第3遺跡A・B地点	24	前ノ田村上第1遺跡	26		
湯牟田遺跡	30	青木遺跡	32	野首第1遺跡	34	野首第2遺跡	38	老瀬坂上遺跡	42
下耳切第3遺跡	44	唐木戸第1遺跡	46	唐木戸第2遺跡	48	唐木戸第3遺跡	50		
小並第1遺跡	52	牧内第1遺跡（三次・四次調査）	56	音明寺第2遺跡（二次調査）	60				
東畦原第1遺跡（一次・二次調査）	62	東畦原第2遺跡（一次・二次調査）	66						
西畦原第1遺跡（二次調査）	68	西畦原第2遺跡（二次調査）	72	勘大寺遺跡	74				
尾小原遺跡	76	向原第1遺跡	78	藤山第1遺跡	80				

## 第Ⅳ章 まとめにかえて

(1) 旧石器時代	82
(2) 繩文時代	83
(3) 弥生時代・古墳時代	84
(4) 古代	85
(5) 中世～近世	85

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 発掘調査の経緯

東九州自動車道の延岡～清武間は、平成元年2月に基本計画が決定し、それに基づき、宮崎県教育委員会（以下県教委）では予想されるルート周辺の分布調査を行い多くの遺跡が確認されている。その中の一区間である都農～西都間にについては、平成6年12月に施行命令が出され、それに伴い平成10年度に県教委が路線上の分布調査を行った結果、計79箇所（896,000m<sup>2</sup>）に及ぶ遺跡の存在が推定された。そこで県教委では、平成11年度から日本道路公団の委託を受け、建設工事で影響を受ける遺跡の発掘調査を実施することになった。平成11年度には3遺跡の確認調査を実施し、12年度より本調査を実施してきたところである。

今年度は平成14年4月1日付けで同公団九州支社と宮崎県（文化課）との間で契約が締結され、同日より平成15年3月31日までの間、宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施するはこびとになった。平成14年4月3日より、川南町湯牟田遺跡や高鍋町野首第2遺跡、新富町東畦原第1遺跡など平成13年度から継続している遺跡の調査が始まり、用地の引き渡しが終わり、準備が整った地区で、順次本調査が開始されている。高鍋町牧内第1遺跡や東畦原第1遺跡などでは、複数の班が並行して調査を行っている。また、用地引き渡しがなされたところから確認調査を実施し、遺跡の性格や包含層の深さなどの資料を収集している。

## 第2節 調査組織

平成14年度の組織体制は次のとおりである。

調査主体 宮崎県埋蔵文化財センター

所長	米良 弘康
副所長 兼 総務課長	大薗 和博
副所長 兼 調査第二課長	岩永 哲夫
調査第一課長	児玉 章則
総務係長	野邊 文博
調査第一課調査第一係長	谷口 武範
調査第一課調査第二係長	長津 宗重
(調査担当者) 調査第一係	山田洋一郎 戸高 幸作 渡部誠一郎 永野 高行 新町 芳伸 倉苗 靖浩 安藤 真二 大山 博志 山口 昇 尾園 賢二 永山 博一 鶴戸 周成 松田 清孝 加藤 学 阿部 直人 小山 博 高橋 浩子 藤木 聰 松本 茂
調査第二係	南中道 隆 横田 通久 永田 和久 都成 量 大村公美恵 山下 健一 原田 茂樹 栗山 正明 草薙 良雄 外山 宏幸 吉富 傑文 長友 久昭 吉本 正典 皮亥 浩志 河野 康男 福松 東一

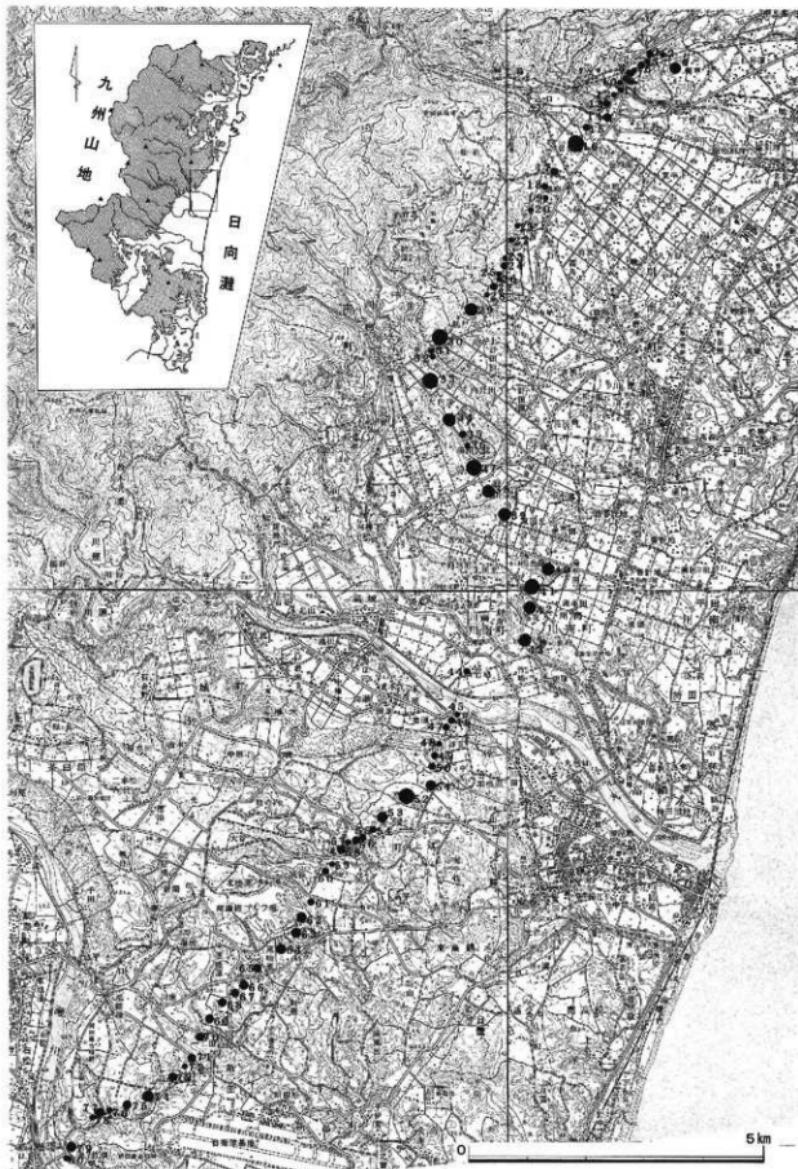


図1 東九州自動車道（都農～西都間）関連遺跡の位置

表1 東九州自動車道(都農~西都間)関連遺跡一覧

市町	遺跡名	所 在 地	遺跡面積 (m <sup>2</sup> )	調査面積 (m <sup>2</sup> )	年 代	種 別	時 代	調 査 結 果	備 考
都	1 鹿全	都農町大字川北	20,000						
	2 岩立塚②	—	1,100						
	4 鹿立塚	—	12,000						
	5 岩立塚③	—	3,000						
	6 岩立塚④	—	12,800						
農	7 岩立塚⑤	—	2,700						
	8 立塚塚①	—	13,500						
	9 立塚塚②	—	5,200						
町	10 立塚塚③	—	4,000						
	11 立塚塚④	—	1,600						
	12 立塚塚⑤	—	4,000						
	13 八船塚	川南町大字川南	3,000						
	14 八船塚②	—	19,000						
	15 上ノ原・中分	—	4,000						
	16 細井塚①	—	33,700	788 856 2,800 441 5,800 1,300 300	14 14 14 14 14 14 14	確認 木製 確認 木製 確認 木製 確認 —	古代・中世 古代 日石器・陶文・ 古文 日石器・純文	14. 5. 2~5. 29 14. 16. 21~11. 6 14. 7. 8 14. 5. 2~5. 29 14. 7. 8~ 14. 6. 17~7. 31 14. 5. 2~5. 7	調査終了
川	17 細井塚②	宇佐岩	7,500						
	18 細井塚③△	宇明町	1,300	100 300	14 14	確認 木製	—	14. 5. 2~5. 7	調査終了
	19 細井塚④△	—	300						
	20 見立口塚①	—	2,000						
	21 見立口塚②	—	9,100						
	22 山ノ口	—	5,200						
	23 谷ノ口	—	200						
	24 白納土塁①	—	6,800						
	25 白納土塁②	—	1,100						
	26 白納土塁③	—	3,900						
	27 白納土塁④	—	4,400						
	28 白納土塁⑤	—	1,800						
	29 保空塚	—	8,200						
	30 中ノ原・二文字木	—	13,400						
	31 大内原	—	2,200						
	32 中ノ原第1	—	79,000	670 20,200 19,200 2,300	12 13 13 13	確認 確認 確認 確認	13. 9. 15~10. 15 13. 10. 15~11. 30		
	33 中ノ原第2	—	—						
	34 中ノ原第3	—	—						
	35 中ノ原第4	—	—						
町	37 鹿ノ原村上第1	宇摩田久保	20,100	5,200 14	13 14	確認 木製	弥生・中世	13. 9. 11~11. 15 13. 12. 15~14. 3. 29	調査終了
	38 鹿ノ原村上第2	—	14,100	2,154	13	確認	—	14. 4. 4~10. 11	
	39 庭坂	—	—						
	40 国原坂	—	—						
	41 溝串塚	宇治牟田	25,000	1,350 2,350 14	13 13 14	確認 木製 木製	日石器・古代	13. 10. 2~11. 29 13. 12. 15~14. 3. 29 14. 4. 3~7. 31	一次調査終了
	42 西ノ原原	—	—						
	43 花火丸	—	—						
	44 竹筋	高田町大字上江字五郎丸	7,100	516 65 585 39	13 13 14 12	確認 確認 確認 確認	— 陶文・中世 陶文・古墳 陶文	13. 10. 2~10. 5 14. 1. 15~1. 23 14. 5. 1~7. 18 12. 8. 7~8. 21	調査終了
	45 青木	宇旗戸	800						
	46 野首第1	宇寄前	6,800→ 10,600	145 1,600 14	13 13 14	確認 木製 木製	陶文・古墳・古 代・近江	13. 12. 17~12. 27 14. 1. 15~3. 29	調査終了
	47 野首第2	宇寄木	11,700	150 6,850 14	12 13 14	確認 木製 木製	日石器・骨器・ 吉備・古代	14. 4. 8~ 12. 6. 19~6. 28 12. 8. 7~8. 22	
	48 南中路第1	宇北中路	19,200	200 13	13	確認	—	12. 9. 19~10. 13 13. 3. 19~3. 18	調査終了
	49 南中路第2	—	3,500						
鍋	50 老板坂上	宇北中原	3,800→ 6,600	110 6,690 14	13 13 14	確認 木製 木製	陶文・弥生・古 代・近江	13. 6. 8~7. 8 13. 9. 3~14. 3. 29	調査終了
	51 下耳切第3	宇下耳切	22,500	210 6,790 7,600 6,900 14	12 12 13 13 14	確認 木製 木製 木製 木製	古墳・古代 陶文 (中・後) 陶文 (後)	12. 6. 19~6. 28 12. 8. 7~8. 22 13. 4. 4~14. 3. 29	調査終了
	52 北牛牧第5	宇牛牧	27,800	200 9,800 5,600 13	12 12 13 13	確認 木製 木製 木製	日石器・中世	12. 8. 7~8. 22 13. 2. 16~2. 21 13. 9. 4~13. 3. 20	
	53 清木戸第1	宇北唐木戸	17,600	200 2,600 14	12 13 14	確認 木製 木製	陶文・日石器	13. 4. 4~14. 3. 29	一次調査終了
	54 清木戸第2	宇北唐木戸	5,600	480 1,200 14	13 13 14	確認 木製 木製	陶文・日石器・ 中世後	14. 3. 11~3. 22 14. 9. 2~	一次調査終了
	55 清木戸第3	宇北唐木戸	2,900	25 12 2,875 14	12 12 13 14	確認 木製 木製	日石器・陶文	12. 6. 19~6. 22 12. 8. 7~8. 22 13. 10. 15~11. 3. 29	調査終了

表1 東九州自動車道(都農~西都間)関連遺跡一覧

市町村	遺跡名	所在地	遺跡面積 (m <sup>2</sup> )	調査面積 (m <sup>2</sup> )	年度	種別	時代	調査期間	備考
高	志木戸第4	萬原町大字上江宇北木戸川	4,100 ~8,010	88 7,812 110	12 13	確認 確認	旧石器・縄文	12. 6. 19~6. 27 12. 8. 7~8. 10	
	志木戸第5	× 宇木木戸川	2,400	200	13	確認		13. 5. 7~12. 27	調査終了
	小笠第1	× 宇西小笠	6,800 ~7,700	650 7,050	13 14	確認 確認	旧石器・縄文	14. 2. 4~14. 2. 22 14. 2. 25~3. 6	調査終了
熊	小笠第2	× 宇黒上田	2,700	50 220	13 13	確認 確認		13. 5. 13~6. 8 14. 4. 1~12. 26	調査終了
				236	12	確認		12. 8. 7~8. 11	
	牧内第1	× 宇牧内	14,400	2,194 3,406 3,700 4,900	13 13 14 15	本郷 本郷 本郷 本郷	旧石器・縄文	12. 11. 6~13. 5. 30 13. 4. 3~14. 5. 29 14. 1. 19~14. 5. 29 14. 4. 3~11. 29	一次調査終了 三次調査終了
町				56	12	確認		14. 9. 17~	四次調査継続中
	牧内第2	× 宇牧内	8,000	529 4,716	12	確認 確認	旧石器・縄文	12. 8. 7~8. 11 13. 2. 5~2. 14 13. 6. 4~6. 27	
	音明寺第1	新富町大字新田音明寺	8,500	150 5,360	12 13	確認 確認	旧石器・縄文・ 中世	12. 4. 13~4. 18 12. 6. 5~6. 14	調査終了
新	音明寺第2	× 宇音明寺	16,800	2,160 500 5,700 712	12 13 14 15	本郷 確認 本郷 確認	旧石器・中世	12. 9. 4~12. 2. 21 14. 1. 30~2. 20 14. 5. 15~12. 26 12. 6. 5~6. 14	一次調査終了 二次調査終了
	東地区第1	× 宇下追口	14,800	5,088 588 2,200 5,800	14 13 14 15	本郷 確認 本郷 本郷	旧石器	13. 11. 1~14. 5. 29 14. 4. 1~6. 30 14. 1. 30~2. 20 14. 5. 20~12. 26	一次調査終了 三次調査継続中
	東地区第2	× 宇中原	7,200	3,482 3,180	14 14	本郷 本郷	旧石器・縄文	13. 8. 1~14. 5. 29 14. 4. 3~6. 9	二次調査終了
富	東地区第3	× 宇大中原	9,000	200 5,200 1,800	12 13 15	確認 水組 本郷	旧石器	12. 7. 24~8. 1 12. 9. 9~9. 29 12. 11. 6~12. 3. 30	調査終了
	西崎原第1	× 宇社合	21,800	250 2,950 2,700 3,000	12 13 13 14	確認 本郷 本郷 本郷	旧石器・縄文・ 佐生~古墳	13. 4. 3~9. 29 12. 6. 5~6. 12 12. 7. 24~8. 3 12. 9. 9~9. 29	調査終了
	西崎原第2	× 宇曲原	18,300	360 700 490	13 14 14	確認 本郷 本郷	旧石器	12. 9. 4~13. 3. 30 13. 4. 3~7. 31 14. 5. 17~9. 26	一次調査終了 二次調査終了
町	上新開	× 宇上新開	19,900	3,710	14	確認	旧石器	12. 6. 11. 9~	調査継続中
	一丁目	× 宇若丁	14,900	41 104 165	12 13 14	確認 確認 確認		12. 7. 24~8. 3 12. 8. 6~8. 31 14. 9. 3~9. 25	調査終了
	勝天寺	× 宇狗取勝	16,900	370	12	確認		12. 4. 13~4. 18 12. 7. 19~7. 28	
町	水串田第1	× 宇水串田	5,100	2,600	14	木組	中世	14. 9. 9~	調査継続中
	水串田第2	× 宇水串田	24,600	530	12	確認		12. 9. 30~10. 6 12. 6. 5~6. 12	
	尾小原	× 宇尾小原	25,600	60 928 4,572	14 13 14	確認 確認 本郷	縄文・旧石器	12. 8. 1~8. 4 12. 9. 23~3. 29 13. 5. 14~6. 1	
富	向原第1	× 宇純内	10,300	800 500 385	11 12 13	確認 確認 確認	旧石器・縄文・ 佐生~古墳	13. 11. 1~14. 3. 29 14. 4. 1~8. 30	一次調査終了
	向原第2	× 宇純内	7,000	25 62	14 13	確認 確認	旧石器	12. 3. 21~3. 28 12. 9. 14~9. 29	調査終了
	藤山第1	× 宇鏡内	3,800	506	14	木組	調査・古墳	13. 11. 1~11. 26	
町	藤山第2	× 宇藤山	2,200	66	12	確認	縄文	14. 6. 3~7. 15	一次調査終了
	宮ノ原	西都市大字四宮宮ノ原 / 宮ノ原	21,900	946	12	木組		12. 7. 24~8. 4	
	宮ノ原	× 宇宮ノ原	200	900	12	確認		12. 9. 24~3. 29	調査終了

調査第二係 藤本 典昭 今塙屋毅行 堀田 孝博  
調査員 可児 直典 松尾 有年 川畠 真二 日高 敏子  
小宇都あづさ 高木 祐志 落合 賢一 安楽 哲史  
金丸 史絵 成相 景子 松元 一浩

### 第3節 調査地周辺の環境

東九州自動車道（都農～西都間）は、宮崎平野を北東～南西方向に貫く形で路線が選定されている。洪積台地上を通るため、多くの遺跡が路線上に分布する。

それらの洪積台地は、標高約80m前後の段丘で、「～原」と称される。小丸川と一つ瀬川の両河川にはまたたいた地域では、新田原・三財原・牛牧原、小丸川以北では国光原・野田原といった台上に遺跡が展開しており、本年度調査が行われた遺跡の多くが、そのような地形のところに立地している。そのうち、最も多くの遺跡が立地する三財原段丘面は、最終間氷期の海成段丘面で、関東の下末吉面に相当する。

近辺の主な既調査遺跡については、平成12年度の『概要報告書I』で簡単に触れているため、ここでは繰り返さないが、旧石器時代から中・近世に至る各時代・時期の重要な調査成果が多くある。特に、一つ瀬川と小丸川の間の地域は、縄文時代中期の春日式土器や、古墳時代の地下式横穴墓、中世の「群郭式」城館など、南九州的な遺構・遺物の北限となる場合が多く、九州の東海岸における異なる分布域を有する考古資料の「接触地帯」の状況を呈している。戦国末期には、川南町・高鍋町の内陸部から木城町にかけての一帯で、大友氏と島津氏、あるいは豊臣氏と島津氏との合戦（高城・耳川の合戦）が行われたが、のことなどは象徴的な出来事といえよう。

### 第4節 層序

#### (1) 基本的な考え方

当該地域の台地上の遺跡において一般的に認められる層は、表2に示す通りであり、表土から26とした阿蘇4までのテフラや、ローム層、黒色土帯が認められる。

各遺跡での調査の際には、各遺跡の堆積状況に応じて上からI・II～のローマ数字を付し、層をあらわすこととしている。そのため、明らかに同一の層でも、遺跡毎に異なった数字が付されることとなり、特に本事業に伴って数多く行われている旧石器時代遺跡の調査においては、遺物の出土層位が問題となるため、影響が大きい。例えばA遺跡のV層とB遺跡のVII層下部が同一の層となる、といった事態が生じる事が予想され、将来報告書を刊行し、遺跡間で比較する場合の一つのものさしを示す必要がある。

以上の点から、基本的に認められるテフラやローム層、黒色土帯については、共通の略称を用いることとしている。表2の「略称」の列がそれであり、特にローム層の場合は上からML1・ML2…、黒色土帯の場合はMB1・MB2…という呼称を新たに付した。頭に冠するMは、「宮崎平野」を意味する識別記号である。

ただし、細かく見れば遺跡間で堆積状況が異なる場合もあり、低地の遺跡の調査事例もある。各遺跡の事実関係の報告を行う際には、従来どおりI・II～の層名を用い、遺物の出土位置（遺

跡間での比較)が問題となる場合に、略称でもって層名を表すこととする。

## (2) テフラ

鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)、姶良Tn火山灰 (A T) などの広域テフラのほか、阿蘇山、桜島、霧島山系のテフラが認められる。

霧島山系のテフラは小丸川近辺が分布の北限にあたる場合が多い。新しいところでは、古代に降下したとされる高原スコリア (Kr-Th) が、低湿地や埋没谷地形部、溝の覆土中のみ認められる。小林軽石 (Kr-Kb) も層をなしておらず、小丸川以北ではほとんど確認できなくなる。小丸川右岸(南岸)にある高鍋町野首第1遺跡あたりまでは、バミス状となって褐色土中に混入する状況が認められる。したがって、この地域では厳密には小林軽石そのものの層は存在しない。本書中で「Kr-kb」と呼ぶ層は「小林軽石を含む褐色土」を指しており、層中に後期旧石器時代末の遺物を包含する場合がある。また、この「Kr-kb」層は、バミスの混入の度合い等から3層に細分される場合が多く、a・b・cの層名が付される。通常、中位にあたるb層中に最も多くのバミスが含まれる。アワオコシは降下軽石を含む赤褐色のスコリアで、高鍋町域では層をなさないことが多い。イワオコシも赤褐色を呈するが、降下軽石が主体となりアワオコシよりは粒が大きい。10cm程の層厚で、ほぼ全域に堆積している。

桜島系のテフラとしては、桜島薩摩火山灰 (Sz-S) が、新富町西咲原第1遺跡や高鍋町唐木戸第4遺跡の埋没谷地形内に堆積していることが確認されている。縄文時代草創期の指標となる重要なテフラであるが、台地上に堆積していることは稀であると考えられる。

阿蘇山系のテフラは、阿蘇4 (Aso-4) が高鍋町小並第1遺跡などで確認されている。これまでのところでは新富町の東咲原第3遺跡が南限となっている。

## (3) ローム層・黒色土帯

アカホヤ下位のMB 0は、黒味が強く、縄文時代早期中葉～末の遺物を包含する。

ML 1は下部ほど褐色の度合いが強くなる。上部には縄文時代早期前葉から草創期、下部に縄文時代草創期から後期旧石器時代末の遺物を包含する場合がある。

MB 1は暗褐色を呈する。Kr-Kbの直下にみられ、硬くしまっている。

ML 2はAT直上の褐色ロームで球形の暗褐色のシミがしばしば認められる。

MB 2とMB 3は、AT下位の暗褐色ロームで、それらの間に白色バミスが混入する層がある。この白色バミスは、姶良深港 (A-Fm) ・姶良大塚 (A-0t) と呼ばれる火山噴出物で、高鍋町小並第1遺跡付近までは確認できる。この白色バミスが確認できない場合、MB 2とMB 3の識別は困難となる。

ML 3はKr-Aw上位の褐色・赤褐色ロームである。東咲原第3遺跡では、この層準から剥片が出土している。

ML 4はアワオコシとイワオコシの間にある明褐色ローム層である。

表2 東九州自動車道（都農～西都間）基本層序

No.	略 称	層 名	年 代	特 徵
1		表土		
2	クロボク	黒色土		
3	Kr-Th	高原スコリア	AD1235	本地域では分布北限に近く、低湿地のクロボク中に認められる。
4	クロボク			
5	K-Ah	鬼界アカホヤ	6.5ka	二次堆積の場合は、暗橙色の場合がある。低湿地では白い。
6	MB 0	黒褐色ローム		
7	ML 1	暗褐色ローム		
8		桜島薩摩 (Sz-S)	11ka	バミスは細かく、シャーベット状のブロックとなつていて。通常は明褐色で低湿地ではピンクがかることが多い。低湿地などの保存状態のよいところでみられる。
9		褐色ローム		
10	Kr-Kb		15ka	小丸川以北では識別が難しくなる。 深年II段丘堆積物
11	MB 1	暗褐色ローム		
12	ML 2			径2～3cmの球形の暗褐色のしみを多く含む。ATの二次堆積や、土壤化、腐植などの影響でAT本体より色が暗いと思われる。
13	AT	姶良Tn	24.5ka	一次堆積層では最下部に大隅降下軽石（姶良大隅：A-0s）が見られる。
14	MB 2	暗褐色ローム		
15	A-Fm	姶良深港	26.5ka	AT直下のブラックバンドと呼ばれる部分で、固くクラックを生じることが多い。MB 3では白色鉱物が少ない。中部にバミス（A-Fm, A-Ot）が密な部分が見られることがある。
16	A-Ot	姶良大塚	30ka	
17	MB 3	暗褐色ローム		
18	ML 3	褐色ローム		
19		赤褐色ローム		
20	Kr-Aw	アワオコシ	41ka	赤褐色。スコリア、ラビリ。固結。イワオコシより細粒。降下スコリアを主体とする。高鍋は分布域の北限に近いので、確認できないところもある。
21	ML 4	明褐色ローム		
22	Kr-Iw	イワオコシ	50ka	赤褐色。アワオコシに比べ粗粒。黄褐色バミスを含む。降下軽石を主体とする。 雷野段丘堆積物
23		明黄褐色ローム		
24		キンキラローム		
25	A-Iw	姶良岩戸	60ka	黄～淡黄色の粘り気のあるローム。高温石英を含みきらきら光る。姶良岩戸（A-Iw）の風化層。粗粒砂大～径3mmの黄色軽石層。黄色いザラメのように見える。高温石英が非常に多い。ATより粗粒。
26	Aso-4	阿蘇4	86-90ka	本来は阿蘇4火碎流噴出の際の灰白色ガラス質降下火山灰もしくは火碎流堆積物であるが、風化が激しい場合が多い。その場合、褐色・橙色・ピンク等に変色。褐色角閃石を特徴的に含む。 岡富段丘堆積物

\*年代は、奥野光・福島大輔・小林哲夫「南九州のテフロクロノロジー」『人類史研究』12(2000)による。未較正。

## 第5節 整理作業の概要

今年度、埋蔵文化財センター本館では延べ20遺跡から出土した遺物の整理作業を実施した。作業内容は水洗、注記、土器・石器の接合、土器の拓本、石膏入れ、実測から製図、レイアウト、写真撮影、金属製品の処理などなど多岐にわたっている。さらに東畦原第1遺跡内に建設した整理作業施設においては、7遺跡から検出された旧石器時代や縄文時代早期の礫の水洗、注記、接合、計測などの作業を行っている。そのほかの14遺跡では、発掘作業と並行しながら現場で出土遺物の水洗、注記、接合までの作業を実施し、整理の進捗を図った。

表3 整理作業実施遺跡一覧

町	遺跡名	遺物量	作業内容
川南	銀座第3A遺跡	土器4箱、石器1箱	水洗、注記、接合、実測、拓本、トレス
	湯守田遺跡	土器2箱、石器13箱	水洗、注記、接合、実測、トレス
	前ノ田村上第1遺跡	土器17箱、陶磁器56箱、石器9箱	水洗、注記、接合、実測
	北牛牧第5遺跡	土器2箱、石器23箱、陶磁器1箱	接合、実測、拓本、トレス
	唐木戸第1遺跡	石器2箱	水洗、注記、接合、実測、トレス
	唐木戸第3遺跡	土器2箱、石器24箱、礫10箱	水洗、注記、接合、実測
	唐木戸第4遺跡	石器8箱、礫125箱	水洗、注記、接合、実測、トレス
	唐木戸第5遺跡	石器・礫1箱	水洗、注記、接合、実測、トレス
	下耳切第3遺跡	土器150箱、石器145箱、礫45箱	水洗、注記、接合、実測、拓本
高鍋	牧内第2遺跡	土器1箱、石器8箱	水洗、注記、接合、実測、トレス
	青木遺跡	土器4箱、石器1箱	水洗、注記、接合、実測
	野音第2遺跡	石器350箱、土器250箱、陶磁器1箱、礫150箱	水洗、注記
	老瀬坂上遺跡	土器32箱、石器65箱、礫300箱	水洗、注記、接合、実測
	小並第1遺跡	土器1箱、石器53箱、礫200箱	水洗、注記、接合、実測
	牧内第1遺跡(3次)	石器10箱、礫24箱	水洗、注記、接合
	牧内第1遺跡(4次)	石器5箱、礫3箱	水洗
	吉明寺第1遺跡	土器5箱、石器55箱、礫25箱	接合、実測、拓本、トレス
	吉明寺第2遺跡	石器28箱	トレス
	音明寺第2遺跡(2次)	土器1箱、石器14箱、礫10箱	水洗、注記、接合、実測
	東畦原第1遺跡	石器9箱、礫85箱	水洗、注記、接合
	東畦原第1遺跡(2次)	石器7箱、礫10箱	水洗、注記、接合
	東畦原第2遺跡(1次・2次)	土器1箱、石器15箱	水洗、注記、接合
新富	東畦原第3遺跡	土器1箱、石器10箱	接合、実測、拓本、トレス
	西畦原第1遺跡	土器16箱、石器3箱	実測、拓本、トレス
	西畦原第2遺跡	石器14箱、礫2箱	水洗、注記、接合、実測、トレス
	西畦原第2遺跡D区	土器21箱、石器2箱	水洗、注記、接合、実測
	藤山第1遺跡	土器1箱、石器6箱	水洗、注記
	尾小原遺跡	土器1箱、石器22箱	水洗、注記、接合、実測
	向原第1遺跡	土器22箱、石器4箱、礫6箱	水洗、注記、接合、実測
	勘人寺遺跡	土器3箱、石器9箱、礫8箱	水洗、注記、接合

\*遺物量は整理段階での箱数

## 第6節 普及活動

本調査の終了まえに、調査成果の公表と埋蔵文化財への理解の高揚を目的として、現地説明会を実施している。今年度は、これまでに11回の説明会を行い、多数の方々に参加いただいた。

また、高鍋町・新富町内の小・中学校による遺跡見学や体験発掘も行われた。

表4 現地説明会等一覧

実 施 日	遺 跡 名	実 施 時 刻	参 加 者
平成14年5月11日（土）	東畦原第1	13:30～15:30	175名
平成14年5月16日（木）	向原第1 (上新田中)	11:00～12:30	生徒52名 教諭3名
平成14年5月17日（金）	向原第1	14:00～15:30	74名
平成14年5月26日（日）	湯牟田 前ノ田村上第1	13:15～16:30	106名
平成14年5月29日（水）	唐木戸第3	15:00～16:30	138名
平成14年8月9日（金）	唐木戸第1	10:00～11:00	94名
平成14年9月14日（土）	小並第1	9:30～12:00	25名
平成14年10月12日（土）	西畦原第1（2次）	13:30～15:30	213名
平成14年10月17日（木）	西畦原第1（2次） (上新田小)	11:00～12:15	66名
平成14年10月27日（日）	野首第2発掘体験 (県総合博物館主催)	11:00～12:30	児童26名 教諭1名
平成14年10月27日（日）	前ノ田村上第1	13:00～15:00	38名
平成14年10月29日（火）	牧内第1	14:00～15:30	83名
平成14年11月6日（水）	唐木戸第2	14:00～15:30	119名
平成14年11月7日（木）	音明寺第2（2次） 東畦原第1（2次）	13:00～15:30	59名
*東畦原第1（2次）調査区において上新田中生徒46名引率教諭3名発掘体験実施			
平成14年11月19日（火）	野首第2発掘体験 (高鍋西小)	9:30～11:30	82名 82名
平成15年2月1日（土）	銀座第1（2・3次） 銀座第2	13:00～15:00	65名

## 第Ⅱ章 確認調査の結果

本調査に先がけて、遺跡の内容把握のための確認調査を随時実施している。その結果、包含層が遺存しなかったり、遺物の分布密度が極めて低いために、本調査の必要がないと判断された箇所がある。本章は、そういった遺跡の概要について掲載する。

### 53 唐木戸第4遺跡D区 (高鍋町大字上江字北唐木戸)

#### (1) 遺跡の立地と調査の概要

唐木戸第4遺跡D区は、A～C区<sup>1)</sup>の西側の段落ちした畠地にあたる(図2)。土層観察の結果、旧地形はB区に連続した緩斜面と谷からなると判明した(図3)。そこで、谷部分の調査は土層確認までとし、緩斜面部分は全面精査を行った。

緩斜面部分では、表土下にクロボクや二次K-Ahが部分的に残存し、クロボク中から剥片(図4-4～7)が若干出土した。土器の出土はないが、縄文時代晩期初頭前後のものと考えられる。

K-Ah下については、先行トレンチのMB0直下の褐色の強い混疊土層(ML1相当)中から剥片が出土した。そこで、MB0～ML1を対象に疊層上面まで全面精査を行った結果、姫島産黒曜石製の打製石鏃、複数母岩のホルンフェルス・尾鈴山酸性岩類製の剥片類(図4-1～3・8～15)の出土をみた。石器類に接合関係は認められない。土器や遺構の検出はみられなかった。後期旧石器時代後半から縄文時代早期までのものが混在するようである。

このほか、表土や攪乱の中から、縄文時代晩期初頭前後と思われる剥片(図5-16・17)が出土した。

#### (2) 小結

唐木戸第4遺跡D区は、遺物組成はA～C区のそれに共通し、また遺物分布の密度は低い。また、D区はA～C区につながる丘陵末端部にあたる。また、石器類に接合関係がみられないことから、遺跡の中心はA～C区にあり、D区については若干の遺物が丘陵部分から流れ込んだものと推定される。

註1) 『平成13年度概要報告』。本報告については平成15年度刊行予定。



写真1 小並第1遺跡より唐木戸第4・第5遺跡を望む(南より)

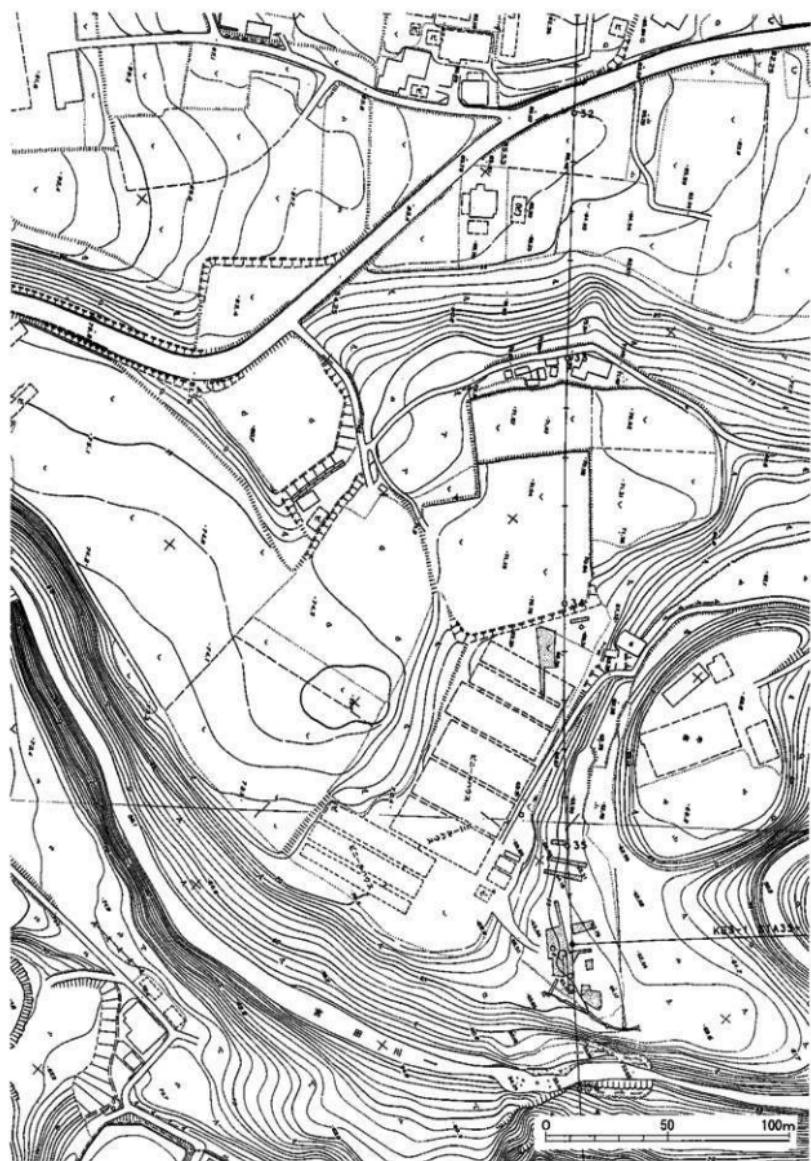


図2 トレーンチ配置状況 (1/2000)

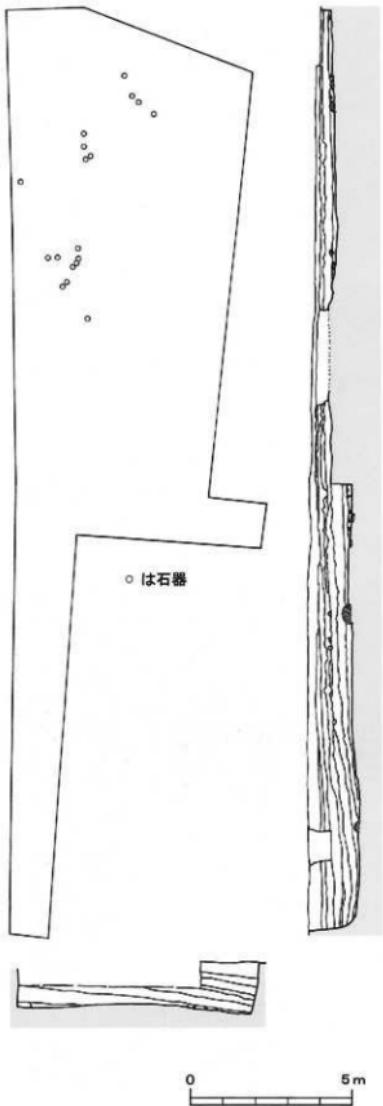


図3 MB 0～ML 1 遺物分布及び土層断面  
(1/150)



写真2 上：MB 0～ML 1 調査状況  
中：二次K-Ah調査状況  
下：調査状況の説明会風景

(1) 遺跡の立地

唐木戸第4遺跡より一段低い緩斜面に立地する。緩斜面の先は、宮田川によって削られたV字谷となり、崖上には小並第1遺跡を望むことができる。

(2) 調査の方法と経過・概要

遺跡はK-Ah直下で礫層に達すると判明したため、調査の主眼はK-Ah上の包含層の有無確認に置き、緩斜面のほぼ全面にわたって精査した。K-Ah面まで削平された箇所は、本来存在したであろう包含層の推定にあてる目的で、表土も精査対象とした。調査の結果、クロボクへ礫層までの層位横軸が4箇所確認された以外に遺構は検出されず、石鏃・剥片各1点(図5-20・22)、表土中や表採で石器(図5-19・23)、現代の陶器等を得た。

なお、唐木戸第4遺跡に続く斜面にもトレンチを設定したが、表土直下で混礫土層や砂層が検出された。

(3) 小結

唐木戸第5遺跡は、K-Ah堆積以前は段丘疊層の露出する場所であり、K-Ah堆積以後、若干の石器類が持ち込まれた遺跡と判明した。石器の時期については、隣接する唐木戸第4遺跡と同様、縄文時代晚期初頭のものと推測される。

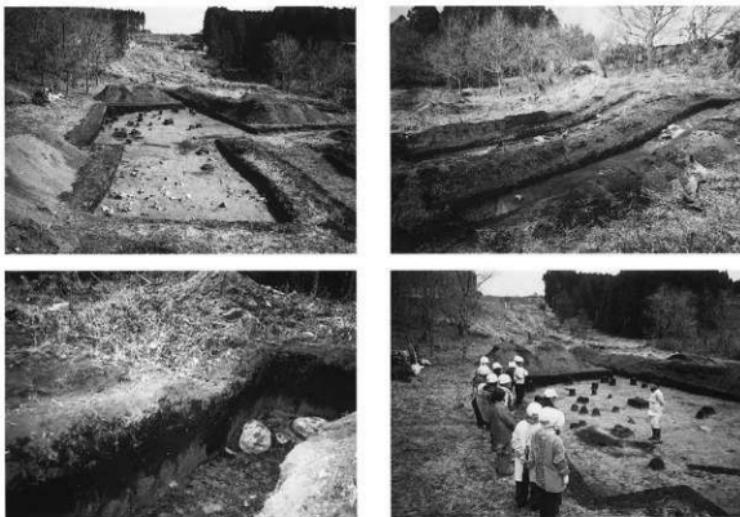


写真3 左上：緩斜面の調査状況  
左下：第二次世界大戦時の通信用溝断面

右上：斜面の調査状況  
右下：現地説明会風景

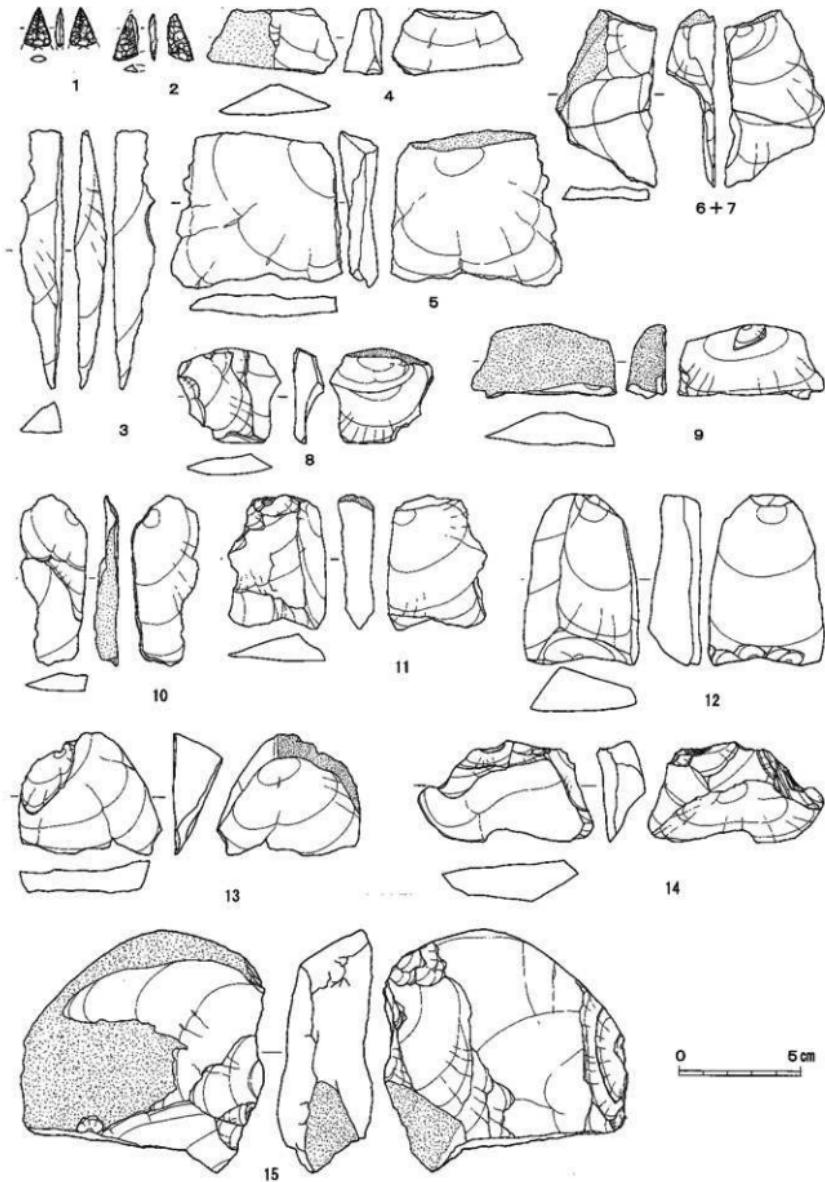


図4 唐木戸第4遺跡D区出土石器（1／2）

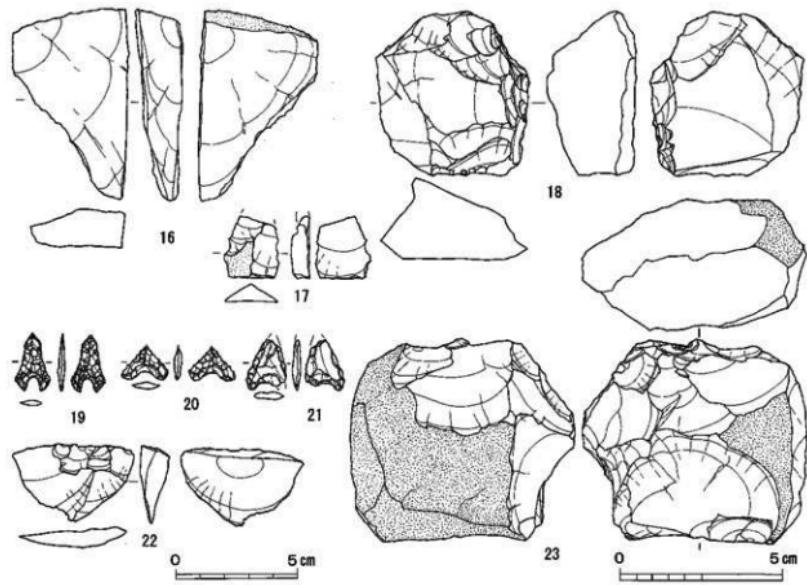


図5 唐木戸第4遺跡D区・唐木戸第5遺跡出土石器（1／2、23のみ1／3）

唐木戸第4遺跡D区 遺物計測表

石材凡例 Os尾鈴山酸性岩類 Hoホルンフェルス Sh頁岩 Ob蛭島灰岩 Chチャート、最大長・幅・厚=cm 重量=g

No.	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	層 位	No.	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	層 位
1	石鏃	Ob	1.9	1.0	0.3	0.4	MB 0	剥片	Ho	4.1	4.1	1.7	16.6	MB 0	
2	石鏃	Ob	1.6	1.1	0.3	0.4	MB 0	剥片	Ho	1.6	2.0	0.5	1.4	MB 0	
3	剥片	Os	10.7	1.8	1.3	17.5	MB 0	剥片	Ho	5.6	2.7	1.8	18.0	—	
4	剥片	Os	2.6	5.5	1.6	18.5	二次K-Ah	剥片	Os	2.6	2.6	1.8	1.5	二次K-Ah	
5	剥片	Os	6.5	7.0	1.6	58.7	二次K-Ah	剥片	Os	3.0	2.3	1.0	6.6	二次K-Ah	
6	剥片	Os	4.9	4.1	2.0	28.3	擾乱	須恵器	—	—	—	—	7.8	擾乱	
7	剥片	Os	3.2	3.7	0.5	5.1	擾乱	陶器器	—	—	—	—	4.3	擾乱	
8	剥片	Ho	3.9	4.3	1.3	17.4	—	剥片	Os	4.2	3.0	1.1	16.3	擾乱	
9	剥片	Ho	3.0	6.0	1.6	32.6	MB 0	剥片	Ho	5.6	2.6	1.8	23.7	一括	
10	剥片	Ho	7.0	2.8	1.0	14.0	MB 0	剥片	Ilo	3.7	2.5	0.8	6.7	—括	
11	剥片	Ho	5.5	4.1	1.5	30.8	MB 0	剥片	Ho	1.8	2.7	0.5	2.7	一括	
12	剥片	Ho	7.1	4.8	2.2	73.2	—	土器器	—	—	—	—	12.0	客土	
13	剥片	Ho	7.6	8.8	3.0	138.0	層位逆転	剥片	Os	2.5	2.9	0.8	5.6	客土	
14	剥片	Ho	6.3	10.8	3.0	145.4	MB 0	須恵器	—	—	—	—	2.3	表採	
15	石核	Ho	15.1	15.0	5.6	1450.0	層位逆転	唐木戸第5遺跡 遺物計測表							
16	剥片	Os	7.9	4.8	2.0	67.7	客土	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	層 位	
17	剥片	Os	2.6	2.3	0.8	4.1	客土	18	削器	Ho	6.8	6.3	3.6	163.9	表採
	剥片	Ho	4.6	3.0	2.1	18.3	MB 0	19	石鏃	Ch	2.4	1.4	0.3	0.6	二次K-Ah
	剥片	Os	9.5	5.3	2.2	76.1	MB 0	20	石核	Sh	1.4	1.9	0.3	0.6	表土
	剥片	Ho	4.5	3.9	1.9	23.4	MB 0	21	石核	Ho	2.1	1.6	0.4	1.1	表採
	剥片	Sh	3.7	1.6	0.4	2.4	MB 0	剥片	Ho	3.2	5.1	1.2	14.1	二次K-Ah	
	剥片	Ho	3.8	2.7	0.4	4.1	MB 0	石核	Ho	13.9	12.7	7.7	1865.0	表採	
	剥片	Ho	2.4	1.6	0.7	2.3	MB 0	剥片	Ilo	7.0	2.6	1.6	24.3	二次K-Ah	
	剥片	Ho	4.8	3.1	1.2	15.0	MB 0	陶器器	—	—	—	—	18.3	表土	
	剥片	Ho	2.1	1.6	0.6	1.8	MB 0								

59 小並第2遺跡 (高鍋町大字上江字黒土田)

宮田川支流の小河川（小並川）沿いの低地にあたる。対象地の東側は後背湿地の状況を呈しており、沼沢がみられる。標高は約72mを測る。平成13年度末に確認調査を実施した。

対象区域内にトレンチを4箇所設定し、掘り下げを行った結果、表土下位に旧水田耕作土とおぼしき黒色土がみられるものの遺物は皆無で、表土下1.1~1.4mで基盤の河成砂礫層があらわれる。このように当地区は、河岸の氾濫原であり、近現代に水田が営まれたものの、それ以前の時代の生活・生産活動等の痕跡は認められない。

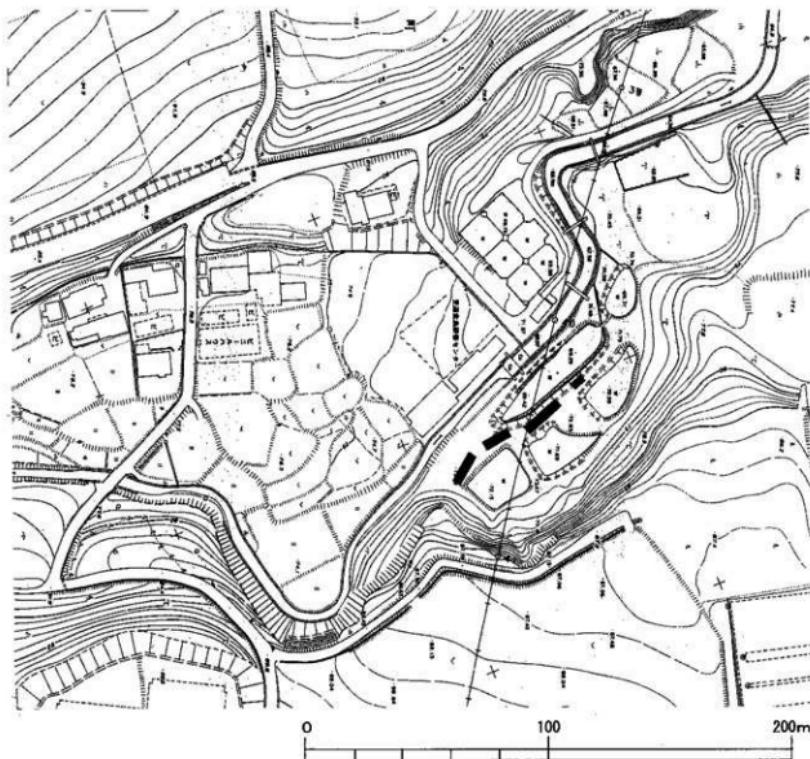


図6 トレンチ配置状況 (1/2000)

70 一丁田遺跡 (新富町大字新田字壱町田)

新田原台地と三財原台地に挟まれた河岸段丘上（深年Ⅱ段丘面）に位置する。今回の確認調査対象区域は水田となっていた。標高は約66m。今回、対象区域内にトレンチを計14箇所設定し、掘り下げを行った。

その結果、K-Ah（IV層）が、対象区域中央から東側にかけて広がっており、その上位、下位にあるクロボク（III層）、MB0（～ML1・V層）より遺物・遺構等の検出が期待されたが、III層で中世の土器類とみられる遺物（流れ込みの可能性大）が1点出土したにとどまった。ほかは何らの遺物・遺構等は出土していない。各層中に砂礫を含む箇所がみられたことから、流路があつたと推測される。なお、K-Ahは残存範囲が把握でき、Kr-Kb及びATも確認された。ATは白色を呈している。

このように、本対象区域は段丘崖下の低湿地であったと考えられ、包含層の存在する可能性はないとの判断される。

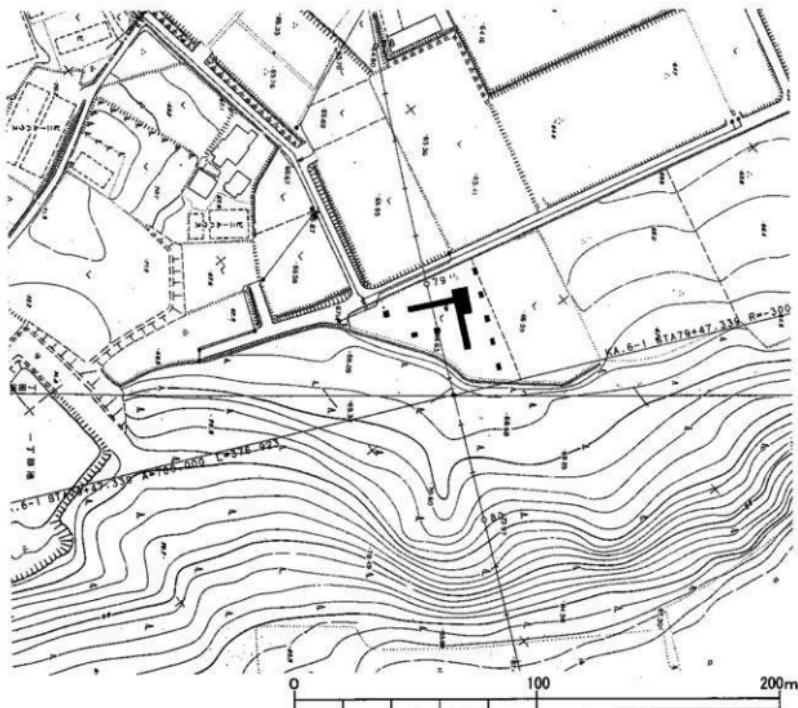


図7 トレンチ配置状況 (1/2000)

## 第三章 本調査の成果

### 16 銀座第1遺跡 一次～三次調査 (川南町大字川南字前田)

#### (1) 遺跡の立地

川南町市街地の北西約3kmに位置し、都農町との町境を東流する名貫川右岸に広がる、標高118mの唐瀬原段丘面上に立地する。また、調査地は、北東から続く扇状地の緩斜面と南西の丘陵から続く緩斜面とが形成するなだらかな谷地形部にあり、その南には緩やかに傾斜する平野が広がる。現地形は、水田や畠地として造成され、起伏はほとんどみられない。

#### (2) 一次・二次調査の概要

これまでに中・近世の溝状遺構9条、掘立柱建物7棟、土壙墓14基、土坑5基が確認されている。K-Ah(II層)上位の遺物包含層は造成及び耕作によってそのほとんどが擾乱されているため、表土中から中・近世を中心とした土師器片、陶磁器片等が出土する状況にある。また、褐色土層(V層)から砂礫層(VII層)にかけて尾鈴山系からの土石流による巨礫の堆積がみられる。

##### ① 溝状遺構

SE1は調査区中央部を西から東に走り、東端で南に屈曲する。調査区南側の掘立柱建物や柱穴群を囲むような形で位置し、確認された溝状遺構の中で最大の規模を呈する。最大幅2.5m、深さ0.9mを測る。溝の断面は逆台形を呈し、建物側は立ち上がりが緩やかで、その反対側は急となる。埋土中には、炭化物が一部みられたほか、15世紀から16世紀にかけての龍泉窯系青磁、白磁の八角小杯、備前播鉢、壺類、茶臼等の遺物が出土している。

SE3は、SE1と比較すると規模は小さいものの、SE1と平行して西から東に走り、東端で北に屈曲する。最大幅1.8m、深さ0.6mを測り、断面は弓形を呈する。このSE3は調査区北側の掘立柱建物、柱穴群を囲むように位置し、溝の壁面の形態はSE1と同様、建物側が緩やかとなる。埋土中には、土師器、陶磁器などの遺物が出土している。SE4を切る。

SE4は幅1.1m、深さ0.45m、断面形は緩やかな「U」字形を呈している。埋土中からは13世紀代の土師器、東播系須恵器が出土している。

調査区東側のSE5・6は「く」の字形に屈曲する溝で、埋土中から弥生土器や古墳時代の土器、13世紀代の土器片などが出土している。調査区東側に、弥生時代から古墳時代にかけての遺物が分布することが確認されており、調査区東側から流れ込んだ可能性もある。

SE7は幅0.85m、深さ0.15mの溝である。断面形は浅い皿状を呈する。SE8は、幅0.75m、深さ0.3mで、断面形は緩やかな「U」字形を呈する。いずれも遺物は出土していない。

##### ② 掘立柱建物

SE1の内区で、SB1(3×1間)、SB2(3×3間)、SB3(3×2間)の3棟の建物跡が検出された。またSE3の内区では、SB4(3×1間)、SB5(3×2間)、SB6(3×1間)の3棟の掘立柱建物が検出された。SB1～3は主軸をSE1にそろえる。またSB4～6もSE3に主軸をそろえており、溝状遺構と同時期の建物と考えられる。

SB2は、3×3間の建物で、平面規模は桁行5.9m、梁行2.7m、柱穴径は0.3m前後である。

検出面からの深さは0.2~0.55mを測る。柱痕跡が認められる。

S B 4は、3×3間の平面長方形を呈する。規模は、桁行6.1m、梁行5.1mで柱穴径は0.3m前後である。検出面からの深さは0.25~0.6mを測る。やはり柱痕跡が認められる。

S B 5は、桁行2×3間の建物で、平面規模は桁行6.8m、梁行4.1m、柱穴径は0.4m前後である。検出面からの深さは0.5m前後で、柱痕跡が認められる。いずれの建物も、年代を特定できる遺物は出土していない。

### (3) 土壙墓

調査区全体で14基の土壙墓が検出されている。調査区北側4基、中央部5基、西側5基の3箇所に分布する。そのうち7基から銭貨が出土している。銭種は「寛永通宝」がほとんどで、1枚または3枚から7枚が重なったものである。S D 2・4から棺釘、S D 5からは布片、木片が付着した銭貨も出土している。土壙墓は主軸をほぼ南北にとり、2~3基切り合っているものもある。規模は大きいもので長軸1.6m×短軸1.0m、小さいもので長軸1.4m×短軸0.9m、検出面からの深さは0.5m~0.7mを測る。

### (3) 三次調査の概要

当初、本調査地南側、銀座第2遺跡までの6,900m<sup>2</sup>については調査対象外としていた。しかし、今回の調査で検出された遺構の分布状況から、さらに溝状遺構や柱穴などの遺構が南側に広がると考えられたため、確認調査を実施したところ、縄文時代と推定される石器や数条の溝状遺構、柱穴、中世に属する遺物などが確認された。このため、遺構、遺物が確認された4,200m<sup>2</sup>について本調査を行うこととなり、銀座第1遺跡三次調査として調査を実施している。これまでに、縄文時代の集石遺構や中世の土師器を出土する溝状遺構等を検出している。また、調査区中央を蛇行する流路から弥生時代や古墳時代の土器が出土しており、土器の磨滅が少ないことからも、近くに当該期集落の存在が推測される。

### (4) 小 結

一次・二次調査では中・近世の遺構が確認されている。S E 1やS E 3は掘立柱建物を囲んでおり、断面形態等からも防御的な役割を果たしていたことが推察できる。出土している龍泉窯系青磁や白磁等の遺物から、15世紀から16世紀の年代が推定できる。また、中世以前の遺物が数点出土していることから周辺部に中世以前の遺構が存在したことも推定できる。

また、周辺地域の聞き取り調査から、昭和初期から戦後間もない頃は無線化した墓だけが存在していたという。土壙墓が溝状遺構を切って遺存していることや遺物も少ないとなどから、近世以後は、墓地だけが存在し、集落がこの場所から移動したのであろう。

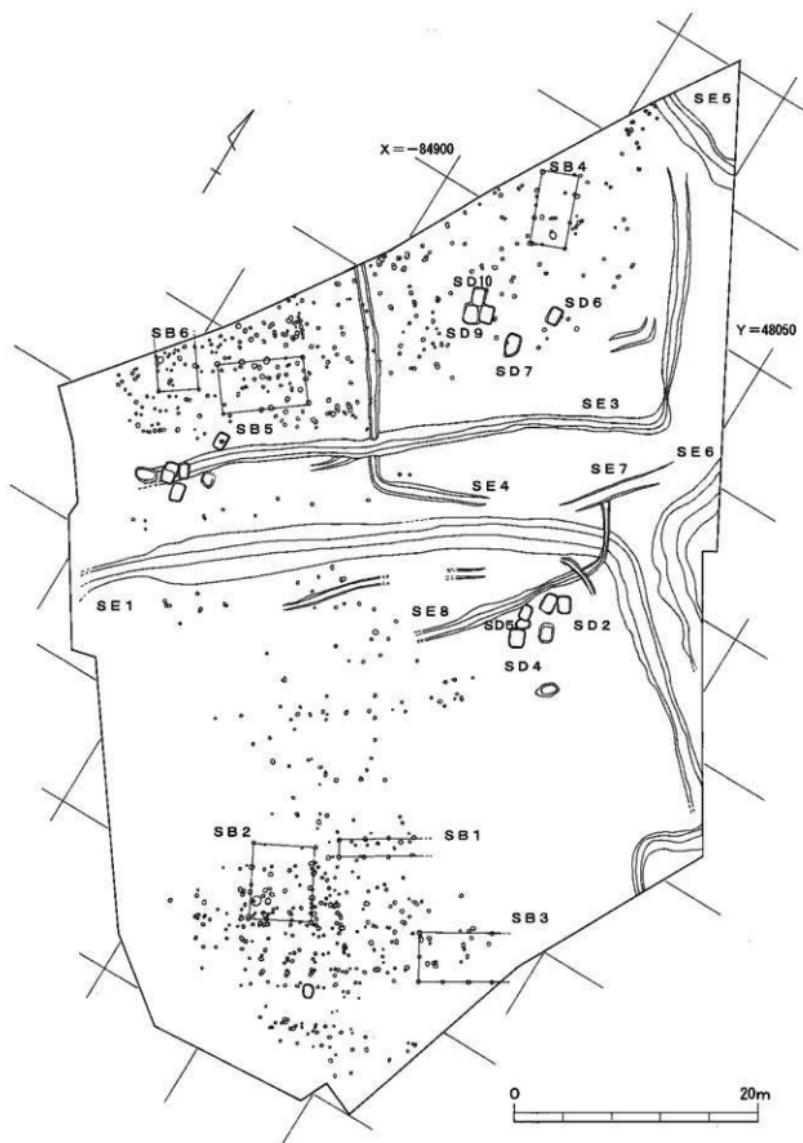


図8 遺構の分布 (1/400)



写真4　遺跡遠景（南より）



写真5 左：調査区北側　右：調査区南側

## 17 銀座第2遺跡 (川南町大字川南字黒岩)

### (1) 遺跡の立地

名貫川右岸の尾鈴山裾部（標高120m）に位置する。調査地はヤツデ状に派生する丘陵間の扇状地上にあり、南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。

### (2) 調査の概要

調査の進行及び土地区画に従ってA～Fの調査区を設定した。A区では、掘立柱建物1棟のほか、K-Ah上面で土坑6基と小穴群が検出されているが、遺物は出土していない。

B区では、K-Ah上面で土坑12基、小穴が50基以上検出された。土坑や小穴からは、近世以降の陶磁器等が出土している。MB0では、赤化窯が集中する区域もみられ、縄文早期土器片や石鏃等が少量出土している。また、MB0より下位の褐色土層からは、礫群3基ほか剥片、碎片、石核が確認されている。

C区の北西部では、寛永通宝16枚のほか、近世以降の陶器類が多数出土しており、掘立柱建物2棟と小穴群が確認された。西側のK-Ah上面では、溝状遺構が4条確認されている。中央部にある土石流堆積物から、弥生時代から近世の遺物が出土している。

D区では、MB0より下位の褐色土層からナイフ形石器や剥片が出土している。

E区では、耕作土下にすぐ旧石器相当層がみられ、確認トレンチより剥片や黒曜石の碎片等が出土している。自然流路が1条確認され、近世以降の陶磁器等が出土している。



写真6 遺跡遠景（北より）

### (3) 小結

以上のように、旧石器時代から近世に至るまでの遺構・遺物が確認されたが、遺構密度は低い。旧石器時代の遺物については、鍵層がK-Ah以外になく、時期の特定が難しいため、遺物自体の検討や自然科学分析によって明らかにしていきたい。またC区では弥生時代以降の遺物が比較的多くみられるが、現段階で遺構が確認されていないため、周辺からの流れ込みの可能性も考えられる。



図9 遺構の分布 (1/200)

## (1) 遺跡の立地

本遺跡は平成11年度に調査された藏座村遺跡に隣接し、藏座村遺跡を頂点に北西部に緩やかに傾斜するA地点と谷をはさんだ傾斜地上のB地点からなる。

## (2) 調査の概要

A地点の調査は、削平を受けていた中央部を除き、北よりA・B区に分割して実施した。MB0(Ⅱ層)では、B区において縄文早期土器及び石鏃等が出土した。ML1(Ⅲ層)はB区のみに堆積しており、早期を中心とする遺物が出土した。明褐色を呈するIV層(A Tの風化層と思われる)では、A区において石核・角錐状石器等を含む礫群(約5m×15m)が検出された。なお、A区のⅢ層上面で、埋土中に炭化物を多数含む土坑が1基検出されたが、出土遺物は皆無であり、時期は判然としない。

隣接するB地点では、トレンチを9箇所設定している(図10)。掘り下げの結果、遺物はT2表土中で水晶製石核及びホルンフェルス製の剥片、Ⅱ層中で水晶製の石核、及び土器片が出土しているのみであり、そのほかのトレンチでは遺構・遺物とも確認できなかった。以上のことから、本調査の必要はないとの判断している。

## (3) 小結

出土土器は縄文時代早期に属するものがほとんどで、流れ込みと判断できるような摩滅した小片が多数を占めた。貝殻文系土器(1)や、押型文系土器(2)、縄文系土器(3)などがみられ、前述の藏座村遺跡の発掘調査成果に通じる成果である。今後、藏座村遺跡や近隣の遺跡との比較・検討を行い、本遺跡の性格を究明していきたい。

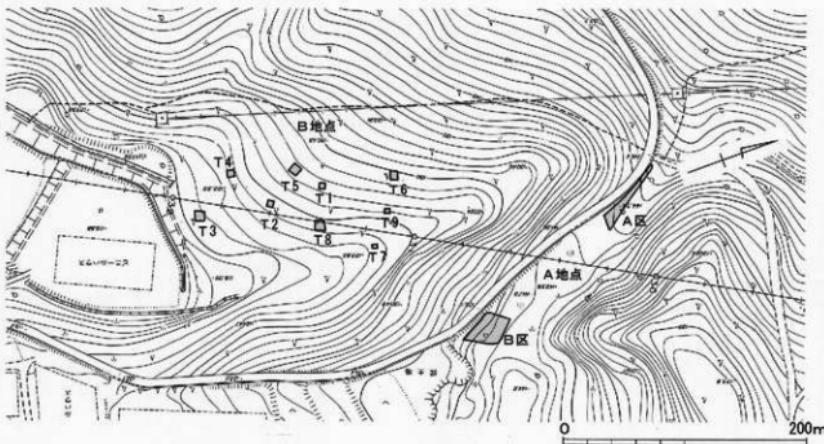


図10 トレンチ配置状況 (1/2000)

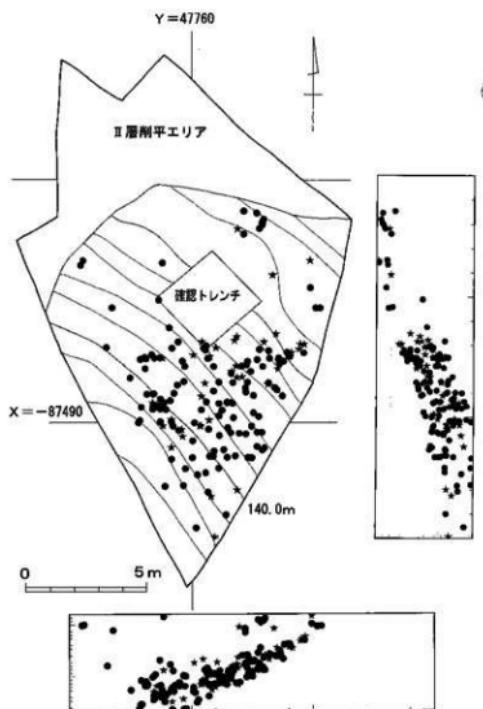


図11 A地点B区 II層遺物分布状況 (1/200)

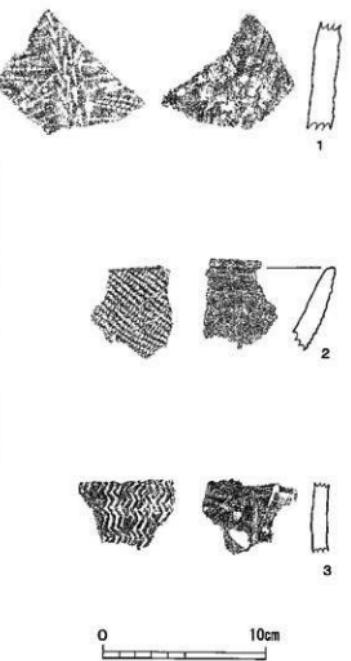


図12 II層出土土器 (1/3)

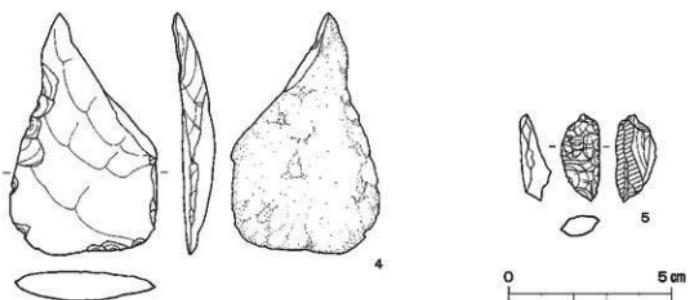


図13 B地点T2 出土石器 (2/3)

37 前ノ田村上第1遺跡 (川南町大字川南字須田久保)

(1) 遺跡の立地

尾鈴山の南東を流れる小丸川の支流切原川と平田川の支流綿打川にはさまれた十文字扇状地Ⅱ面上に立地する。十文字扇状地は西から東にかけて緩やかに傾斜しているが、調査地は1948~55年に実施された国営開田事業によって削平・造成されている。標高は約63mである。

(2) 調査の概要

弥生時代後期の堅穴住居、中世の小穴群と掘立柱建物、溝状遺構、道路状遺構、土坑、石組遺構が検出された。ほとんどの遺構は、表土の直下にあるK-Ah上面で検出され、旧地表面はすでに削平されていた。

① 弥生時代

堅穴住居はA区で1軒のみ確認された。一辺約4mの規模を測り、2箇所の張り出し部を有する(図14)。また、床面にはベッド状遺構が巡り、主柱穴は4本である。床面直上に、屋根材(垂木)と思われる炭化材が遺存していた。また、多数の土器(壺、鉢、壺等)や石包丁(方形抉入り)3点、砥石1点等が出土した。床面直上から出土した櫛描波状文を施す複合口縁壺等から弥生時代後期末葉の住居と推定される。

② 中世

中世の小穴群はA区のほぼ全域でみられ、埋土中から土師器片が数点出土したものもある。A区の溝状遺構については、半町か1町(約109m)四方の区画溝と思われる。A区の南側を囲むように巡っているものは14世紀頃の領主層の居館と推定され、区画中に22棟の掘立柱建物が確認された。また、北東側を巡る3条の溝に囲まれた区画は、15~16世紀頃の集村と考えられる。

B区では、中央から北側にかけて掘立柱建物5棟が確認された。

A区のSC21から、五銖錢が出土した。長軸長0.8m×短軸長0.6m、検出面からの深さ約0.2mの小振りな方形プランの土坑である。五銖錢はほかの1枚の錢貨(北宋錢か)と鏽着しており、この遺構自体は中世の墓壙である可能性が高い。

表土中から多数の陶磁器・土器等が出土した。このうち青磁には龍泉窯系の鑄蓮弁文碗をはじめ、中国から輸入されたと推定できるものが多数認められた。また陶器には常滑窯、東播系の製品等がみられる。

③ 時期不明の遺構

道路状遺構が2条検出された。波板状の硬化面が南北に延びているが、削平によりごく浅く残っているのみで時期等不明である。また、石組遺構が1基検出された。1.2m×1mの方形で、0.2m大の扁平な礫を底面及び側面に組んでいる。底面から約0.05m上の埋土中に灰および炭化材(真竹か)が含まれ、石組は内側に面した部分が赤化している。

### (3) 小 結

弥生時代の竪穴住居と中世の掘立柱建物群が検出されたA区は、その隣接地を今後調査する予定である（三次調査）。弥生時代の竪穴住居は、1基のみの検出であったが、近辺に集落が存在した可能性が高い。また、中世の居館についても、溝に囲まれた部分が新たに確認されることで、より多くの資料が得られるものと期待される。



写真7 A区完掘状況



写真8 遺跡遠景



写真9 調査区全景（A・B区）

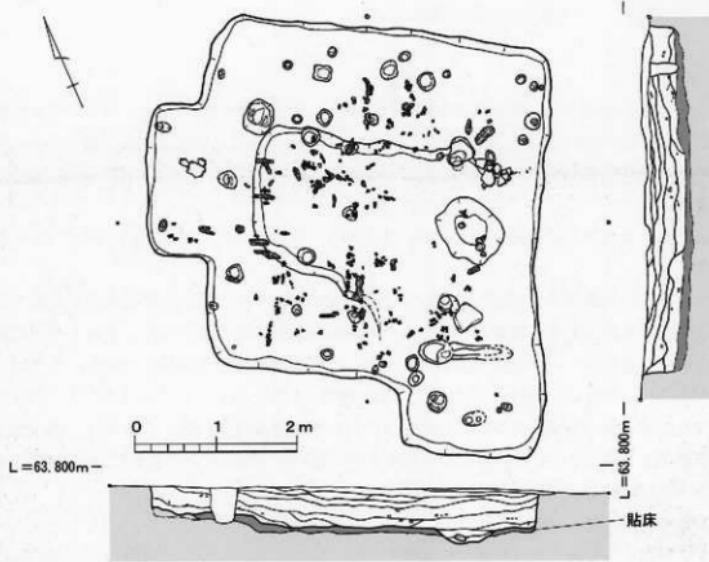


図14 弥生時代竪穴住居跡



写真10 竪穴住居跡から検出された炭化材

## 41 湯牟田遺跡 (川南町大字川南字湯牟田)

### (1) 遺跡の立地

切原川と平田川に挟まれた国光原の南西部に位置し、標高は約62mである。同じ台地上の南西約800mには川南古墳群がある。旧地形は、海岸側に向かってなだらかに上がる勾配となる。現地形は、戦後に基盤整備がなされ、場所によっては段差が多少あるものの平坦に削平されている。

### (2) 調査の概要

本遺跡では、確認調査の結果をもとに調査地を絞り込み、A 1 区、A 2 区、B 区、C 区の調査区を設定した。

A 1・2 区は、黒褐色土（II 層）及び K-Ah 上面で遺構検出を行った。道路状遺構が検出され、多数の土師器小片が分布する箇所が確認された。道路状遺構の埋土中からは、石庖丁や須恵器が出土している。B 区は、K-Ah 上面で遺構検出を行い、道路状遺構が 1 条検出された。また MB 0 (IV 層) から ML 2 相当層 (VII 層) にかけて遺物が確認された。なお、A T 及びその下位の層が欠失しており、ML 2 (VII 層) の下位には Aso-4 の二次堆積層がみられる。C 区では、耕作土下で道路状遺構が 1 条検出され、その直上で近世のものと思われる陶器片が出土している。また、K-Ah 上面でも溝状遺構 1 条と道路状遺構 2 条が検出された。

#### ① 後期旧石器時代

ML 1 (V 层) から ML 2 (VII 層) にかけて角錐状石器や剥片が出土し、小林怪石を含む褐色土層 (VI 層) 及び ML 2 (VII 層) からナイフ形石器が出土した。また、ML 2 (VII 層) で疊群が 1 基検出された。

#### ② 古代以降

A 1 区、A 2 区において、次のような道路状遺構が 10 条検出された。

- ・ 硬化面のみの道路状遺構～1 条 (SG 10)
- ・ 側溝なし・波板状凹凸面なしの道路状遺構～2 条 (SG 1・6)
- ・ 側溝なし・波板状凹凸面ありの道路状遺構～5 条 (SG 2・3・4・5・7)
- ・ 側溝あり・波板状凹凸面なしの道路状遺構～2 条 (SG 8・9)

### (3) 小結

A 区・C 区で検出された道路状遺構は概ね東西方向へ走っているが、その構造や形態、走向などに違いがあり、これらの道路状遺構には時期差があると思われる。



写真11 A 1 区北部の道路状遺構 (西より)



写真12 遺跡全景（東より）

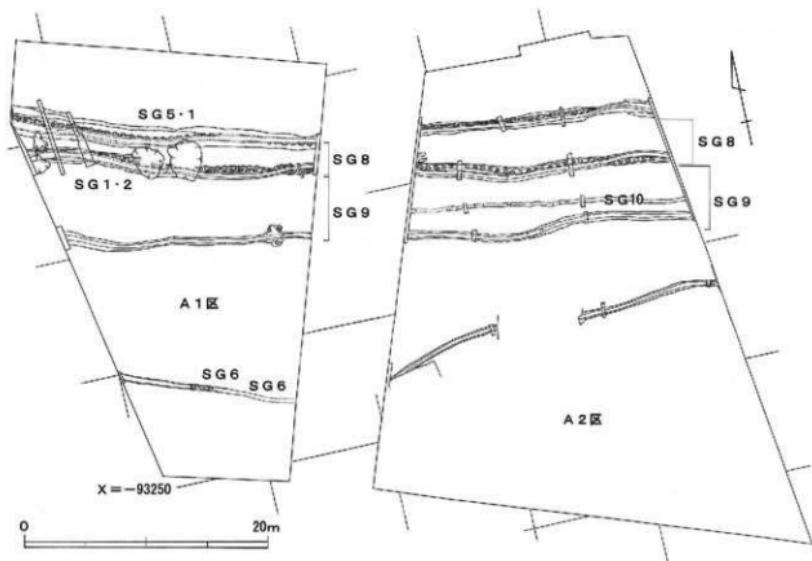


図15 A 1・2区遺構の分布（1/400）

## (1) 遺跡の立地

小丸川右岸の低段丘上に立地する。標高は約18m、河岸低地との比高差は12mを測る。

## (2) 調査の概要

中世の遺物を含む灰黒褐色土(II層)と、MB0相当層(III層)が主たる調査対象となった遺物包含層である。そのほか、表土(I層)下部より縄文時代前期の土器が少量出土している。

## ① 縄文時代

本遺跡ではK-Ahが認められない。これは後世の遺構構築の影響を受けたためと考えられる。II層の直下がMB0(III層)となる。ただし、調査区の北側ではMB0はみられず、II層直下に基盤の河成粘土層があらわれる。MB0は中央～南側のみに認められた。

このMB0の層中で集石遺構が5基検出されている。うち2基(SI1・SI4)は、掘り込みや配石を持つものである。またSI5は掘り込みは持たないものの、径0.4mほどの円内に、密に赤化粧を集めている。そのほかの2基は、平面的な破碎縦の集積箇所である。

遺物は押型文系上器(横円・山形・無文)、黒曜石・チャート・水晶製の石礫、剥片が若干量出土しているほか、MB0の下部より草創期に属するとみられる隆起線文土器や尖頭器、細石刃が少量出土している。

また、表土(I層)下部より轟B式など縄文時代前期の土器が出土している。該期の包含層はみられなかったことから、K-Ahともども、II層期の遺構構築や、明治時代の一時期、当地にあつたと伝えられる尋常小学校の建設による影響を受けたものと考えられる。

## ② 中世

調査地のほぼ全面に広がるII層を掘り下げ、遺構の精査を行った結果、多数の柱穴、土坑が検出された(図16)。遺構は、北側では基盤の粘土層で検出されるが、南から西側にかけて浅い谷を埋めるように盛られた褐色土による整地土層上に構築されている。

調査区の北側と西端近くで、布掘り状の区画施設が確認されている。幅0.3～0.5mの溝の中に柱が並ぶもので、櫛列か堀などの施設の跡と考えられる。それらは平面逆「L」字を描くように配置されており、中央部近くでは2棟の南北棟掘立柱建物が、さほど企画性は高くないものの、柱筋を備える形で並んでいる。いずれも桁行4間の建物であり、柱掘方は径約0.5～0.7mのやや角張った円形を呈する。検出面からの深さは1.0m前後。柱痕跡は明瞭でない。

また、東西棟の掘立柱建物(1×4間)1棟、隅丸方形・円形の土坑が8基、石組遺構が1基検出されたほか、性格不明の小穴が多数認められた。石組遺構は「コ」字形に礫が配され、礫に囲まれた空間に焼土、炭化物が詰まった小穴がある。

小丸川河床に面する調査区北端では、平坦部が段をなしており、列状に並ぶ柱穴も確認されている。この柱穴列の柱穴掘方内には、柱痕跡が明瞭に残っており、計0.15m程の柱を用いた構築物であることが判明した。

さらに、調査区の南端近くでは、隅丸方形の土壙墓が1基検出されている(SD1)。埋土中より銭貨(銭種不詳)、数珠玉、鉄釘が出土している。

### (3) 小結

区画内に建物等が配置された中世の遺構群は、河川の通行や対岸を意識した集落、あるいは船着き場等の交通拠点的な施設であった可能性が指摘できる。II a 層や遺構内より出土した青磁碗等の遺物の年代観から、概ね15世紀後半から16世紀代に営まれていたと考えられる。ただしSE 1のように主軸の異なる遺構や、SD 1など明らかに時期の下る遺構もあり、検討を要する。

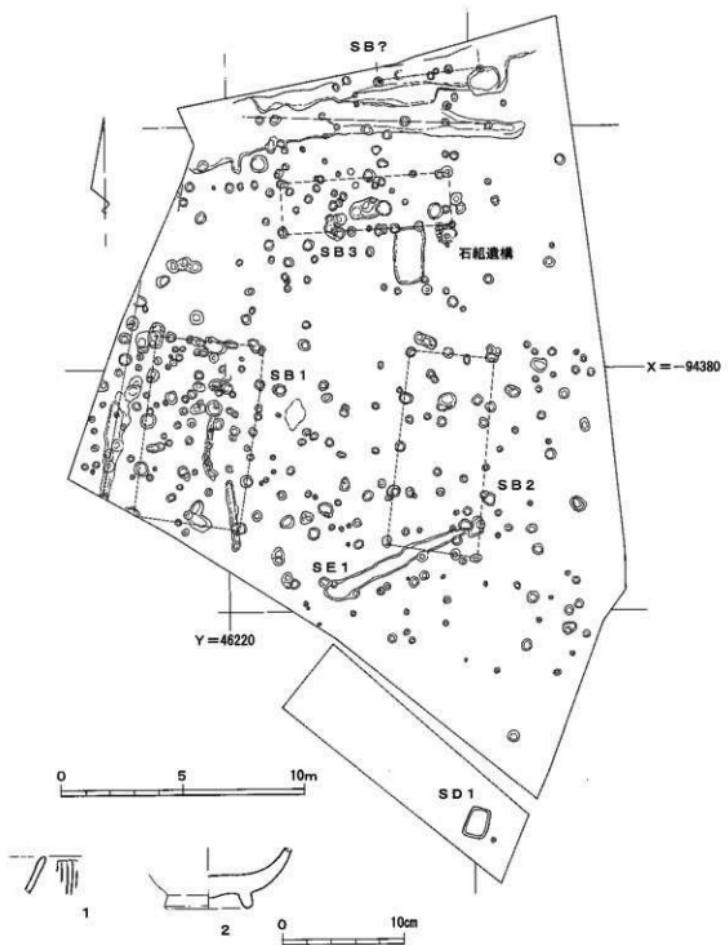


図16 中世遺構の分布及び出土遺物

## 46 野首第1遺跡 (高鍋町大字上江字野首)

### (1) 遺跡の立地

小丸川の右岸、丘陵が複雑に入り組みつつ展開する青木段丘裾の開析谷に位置する。調査区は北東に向かって下る谷の大部分を含むが、斜面のほぼ全面にわたって段違い状に平場が認められる。標高は約20~30mを測り、調査区内での高低差が大きい。

### (2) 調査の概要

谷筋を走る里道を境界として、調査区全体をA~C区に分割し、現在はA・B区の調査を行っている(図17)。A区では旧石器時代~近世の遺構・遺物が、B区では縄文時代・古墳時代の遺物が確認されている。

A区には段切り造成により5箇所の平場が存在し、段切りのため表土除去時にK-Ah上の黒色土から段丘疊層(宮崎層群)まで縦状に露出するという状態であった。造成の時期は近世の可能性が高い。疊層より上はKr-Kbを含むローム層まで確認されるが、堆積は不安定で台地上から谷部への流れ込みによる二次堆積と判断される。縄文時代早期の集石遺構1基、古墳時代後期の堅穴住居1軒、近世後半の石垣・土壘・建物跡1棟・近世墓1基・溝状遺構1条・石組遺構2基・土坑約40基が検出されている。

B区にも5箇所の平場が存在したが、一部は近代以降の畑作に起因するものであった。このため表土を除去すると段差が消失し、なだらかな谷の斜面が現れた。表土下ではK-Ah上の黒色土から疊層まで確認されたが、一部ではA-Tの二次堆積層の可能性があるローム層も存在していた。

現在はK-Ahが比較的良好に残存する谷の奥部で小穴群を検出しているが、出土遺物が少なく、時期の特定には至っていない。

#### ① 縄文時代

A区で早期の集石遺構が1基検出されているが、今後の検出作業により増加する可能性は高い。遺物としては早期・前期・後期の土器・石器が認められ、特に早期の押型文系・条痕文系土器や前期の轟B式・曾畠式土器の量が卓越している。後期の土器は少ないが、黒色磨研系や貝殻文系、磨消縄文系など多様である。また両端打ち欠きの石鏃をはじめとして打製石斧・磨製石斧・磨石・敲石など後期頃の所産と推定される各種石器がみられる。

B区ではK-Ah上の黒色土より後期の粗製土器が多量に出土し、黒色磨研系・貝殻文系の精製土器がわずかに伴う。石器の様相はA区とはほぼ同じである。

A・B両区の遺物とも隣接する台地上(県道改良工事に伴う野首第1遺跡・野首第2遺跡)から流れ込んできた廃棄物という印象が色濃く、生活空間そのものが展開していた可能性は低い。

#### ② 古墳時代後期

A区で堅穴住居1軒を確認した。5.1m×4.4mの隅丸長方形プランを呈する。後世の削平を受けたため、かろうじて貼床面が残存している状態で遺物量は少ないが、土師器杯・甕・須恵器杯、方頭鏡などが出土した。また埋甕炉(土器埋設炉)が2基検出された。一方は住居のほぼ中央に位置し、張りのやや強い球胴の甕を用いている(埋甕A)。他方は中央より南南西へ約1.4mの位置にあり、胴の張らない長胴甕を用いている(埋甕B)。型式的特徴より埋甕A→埋甕Bの新旧関



写真13 遺跡全景（南より）

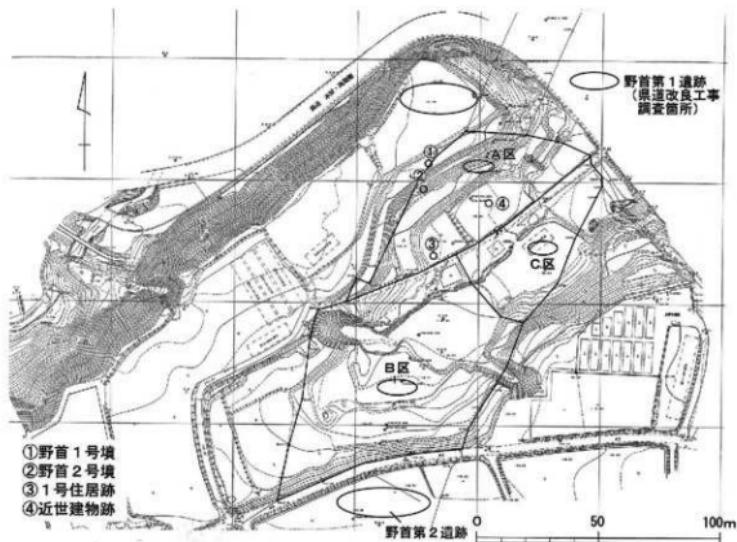


図17 調査区の位置（1/2000）